南紀田辺世界遺産フィルムコミッション－田辺市－

映画のロケを誘致。
地域の魅力や観光資源など
映像で発信していく。

南紀田辺世界遺産フィルム
コミッション代表
愛瀬 健太さん

２００５年７月の設立から
すでに映画２本支援。

『南紀田辺世界遺産フィルムコミッション』代表の愛瀬健太氏。本職は地元の福祉施設で働く二十九才の青年である。同フィルコミは平成十七年七月に設立した。フィルムコミッションとは、映画やテレビドラマなどロケーション撮影を地元に誘致したり、撮影がスムーズに進むようさまざまな支援をおこなう非営利の公的機関のことで、海外ではすでによく知られたプロモーション活動である。映画やドラマを通じて地元のＰＲにつなげようと、最近では日本でも自治体や商工会議所、コンベンションビューローといった公的機関が一つの体制をつくって積極的にこういった事業に乗り出してきており、地域経済の活性化や観光振興など大きな成果を上げているケースもある。　「本当はぼくたち、この秋に公開する『幸福（しあわせ）のスイッチ』という田辺が舞台の映画の撮影をボランティア支援するために、そのタイミングで立ち上げたんです。ところが別の制作会社からぜひ協力して欲しいとオファーがあって、『幸福のスイッチ』がはじまる前にもう一本映画をお手伝いすることになったんです。立ちあげてまだ二ヶ月ほどしか経ってない、九月の初めごろでした。みんな仕事もってるし、初めて経験することばかりなんで、撮影が押してきて深夜おそくまでの時は、肉体的にもけっこうきつかったですねえ」と、当時のことをふり返りながら愛瀬氏は苦笑した。

その映画『ストロベリーフィールズ』がクランクアップして一ヶ月後、十一月から『幸福のスイッチ』という同じく映画のロケハンが始まった。それまでにも助監督が前乗り込みでやって来て一ヶ月間ほどべったりと現地に泊まり込んで、田辺市やその周辺をぐるぐる見てまわり、いろいろと現地情報を東京の監督のもとへ送り続けていたという。そのロケハンに同行したときのこと。「この海の輝き、情感があってきれいだなあ。ねえどう思います」と助監督に感想を求められたが、いつも見なれている田辺湾の海だったので「ああ、確かにきれいですねえ」とうなずくしかなかったと頭をかく愛瀬氏。十二月になって、監督とプロデューサー、ラインプロデューサーの三人が現地にやってきた。クランクインは二月六日。一気に撮影モードへと突入していく。フィルコミのメンバーたちはそれまでに、民家を借りてセットをつくる交渉をしたり、エキストラの募集をかけたり、車両手配とか撮影許可の申請、のちに四十名以上の撮影スタッフがやって来るが、それだけの大人数の宿泊先や食事の段取り、小道具の調達、撮影後のゴミの後かたづけなど出来るかぎりの裏方的な手伝いを愛瀬代表を筆頭にみんな率先してやった。「ふるさとの良さがにじみでるような作品になってくれれば嬉しい」と、田辺商工会議所青年部やパナット田辺グループ、

上秋津をはじめ地元住民の協力も大きかった。エキストラの呼びかけには二百人近くの応募があったという。

地域振興につながるか
地元民たちの腕次第。

　監督の安田真奈氏は大学卒業後、家電メーカーに就職。勤務のかたわら年に一、二本の自主映画を撮りつづけ、「ＯＬ映画監督」と多くのメディアで取りあげられたことがある。ある映画祭で連続三回グランプリ受賞、その他各地映画祭で入賞多数。在阪テレビ局のプロデュースにより撮った初の１６ミリ映画で三つの賞を受賞した。そのうち会社との両立がむずかしくなり、九年間以上勤めた会社をやめて本格的な映画の道へと進む。その後も次々にテレビドラマの監督や脚本を手がけていく。グランプリ荒らしと賞賛された才媛であった。自然体の作風と関西弁を持ち味に等身大で描く人間ドラマが多くの人々に共感されて「安田ワールド」と評され、彼女の作品のファンは多い。そして今回、『幸福のスイッチ』で安田監督は初めて劇場映画のメガフォンを取った。「雨降らしのシーンがあったんですが、京都の太秦から本職の職人さんがきて太いホース何本も使ってジャバジャバ降らし、その水滴にライトあてて本物以上に迫力ある映像つくるんです。ぼくも映画好きやから制作の裏側を見せてもらえてうれしかったですね。実力派がそろった役者さんの迫真の演技を目の前で実際に見てると、正直鳥肌が立ちましたね。監督の安田さんがまた凄かった。カット割りひとつ取ってもひと味ちがうんです。じゃまにならんよう現場で友人と溜め息つきながら見てましたねえ」

　小さな電器店を営む、家業しか頭にない頑固な父親。はじめは父親に反発しながらも次第に気持ちを理解し、家族の絆に気づいていく娘の成長を描く『幸福のスイッチ』。出演者に関西人が多かったけれどクセのある和歌山弁の、さらに田辺地方の方言はイントネーションが独特なので、フィルコミの副代表が台詞をＣＤに吹きこんで送り、俳優たちに聞いてもらい徹底的に田辺弁をマスターしてもらった。ひとあし先に『幸福のスイッチ』の試写を見たその彼は、あまりの素晴らしさに感動して号泣してしまったという。「どこの誰かわからん人に道端のお婆ちゃんがひょいと蜜柑など手渡してくれる、その自然な行為に撮影隊の人たちはびっくりしてたけど、もともとこのあたりはそんな土地がらで、誰に対しても気さくで親切なんですよ。この映画とかかわって、また自分の住むまちが好きになりました。あとは一人でも多くの人にぜひこの映画を見てもらいたいですね」と、愛瀬代表。田辺市では弁慶祭りの催しの一つとして十月八日に『弁慶映画祭』を実施し、紀南文化会館で特別上映する。成功を祈りたい。

映画「幸福のスイッチ」主演の上野樹里さん（中央）、本上まなみさん（中央右）、中村静香さん（中央左）を囲んで記念撮影の出演者と一緒に。

大好き日置川の会ー白浜町ー

田舎暮らし体験や修学旅行の誘致支えるホスピタリティ。

大好き日置川の会
会長
奥山沢美さん

南紀熊野体験博に その原形があった。

日置川町は、平成十八年三月一日に隣接する白浜町と合併した。今回取材した『大好き日置川の会』は、いま和歌山県が積極的に推進している体験型観光の振興や、「新ふるさと創り」の取り組みである「田舎暮らし体験」と流れを同じくして、とくに日置川地区の民間と官が協力し合って独自のやり方でまちおこしを進めている民間団体である。現在、十四の団体と個人四十五名が会員になっている。設立は平成十六年十月五日。会長の奥山沢美さんにお話をうかがった。

「もともとこの会の源流と申しますか、原形というのは平成十一年の南紀熊野体験博のころまでさかのぼります」と、にこやかにお話される奥山さん。おだやかな口調のなかにしっかりとした考え方と人柄の良さが滲みでる。

「その当時のことは私、わからないのですが、南紀熊野体験博にアドバイザーとして参画された刀根浩志さんという方がおられて、熊博終了後もさらに体験型観光を継続させていくために『ネクスト日置川まちづくり協議会』という組織を立ち上げられたんですね。そのころ刀根さんはたまたまこの日置川流域の中島のオートキャンプ場でカヌーの体験教室を運営されておられて、それでぜひ日置川から体験型観光をスタートさせたいといろいろな方々に声をかけられ、みなさんと一緒になって一生懸命やっておられたんです。カヌー体験もそうですけど、藍染め体験とか、農業体験、炭焼き体験、間伐体験などをね」

「そして平成十四年ごろから県が『ほんまもん体験』に力をいれるようになって、このまちでも本格的に引き受けるにあたって、横のつながりを強くし、すそ野を広げようということで、この会が生まれました」

「会長という大役をお受けすることになったのは、ちょうどそのころ私自身もこのまちの将来にものすごく不安をもっていたからなんです。このまま何もしなかったら、きっと衰退してしまうなあって。うちには二十代の息子が二人いますが、二人とも東京で就職して暮らしていて、家業の製材所と梅干屋を継いで欲しいと内心では思ってはいても、これだけ人口が減って同世代の若者がいなくなったら帰ってきても、かわいそうやなあと。ここでは、いまだに私らが若い人って呼ばれるんやからねえ（笑い）」

田舎体験に 修学旅行生が感動。

「すぐに企業誘致いうてもこれは到底ムリな話で、現実これからこのまちを活性化させていくためにどうするべきか。その一つが交流人口を増やしていくこと。どうしたら交流人口を増やしていけるか。観光で来てくれる、修学旅行とか生涯学

習の一環として多くの方々が滞在してくれる。人が来てくれたらそこに産業が生まれる可能性もありますからね」

「中島地区で乳牛を飼って、牧場を経営しておられる二株さんは、乳搾りとかアイスクリーム作り、手作りソーセージ体験などをされてます。海外で本格的な畜産の研修も受け、留学先の西ドイツで食べたソーセージの味が忘れられないからと、ご自身で研究をかさねてソーセージ作りを習得されたチャレンジ精神旺盛な努力のひとです。素敵な方ですよ。

旅行者たちにも人気のある陶芸教室を開いておられる鈴木さん夫婦は埼玉出身のひと。趣味で全国のキャンプ場を次々とまわられ、これほど自分たちの感性にぴったりとくる場所はないと惚れ込んで田野井地区に移住してこられました。ご夫妻に、何がそんなに良かったのかお聞きしたら、ひっそりと静かで自然が俗化されていないということでした。

昨今のようにＩターンとかＵターンとかそんな言葉がでる前に、この日置川という風土や土地柄、自然の美しさを本気で気に入ってくださっていち早く定住された方たちがリーダー的な役回りをしてくださってます」

木村良樹和歌山県知事とも懇意であり、県の観光大使に任命されている木村政雄氏が総合プロデュースする『有名塾』が「大人の修学旅行」として選んだ先がこの日置川地区だった。先月の九月二十三日、二十代から七十代まで幅広い年齢層の塾生たち二十七名が現地にあつまって『大好き日置川の会』のメンバーたちと交流会や意見交換をすすめる中で『有名塾』ならではのパフォーマンスで地域が活性化していくためのアイデアを四グループに分かれてプレゼンテーションを披露した。こんどはこちらがそれに答えていく番だと、奥山会長はいう。

また、若い世代の子どもたちに「ほんまもん体験」をぜひ味わってもらいたいと、全国の中学校や高等学校からの修学旅行を受け入れているという。もともと「鮎とテニスのまち」として売り出してきた日置川地区。川沿いの民宿と海沿いの民宿とが受け皿としてお互い協力し合いながら、総勢百数十名ほどにもなる子どもたちを分宿して民泊させることになった。

「各民宿さんでは子どもたちと一緒になってサンマ寿司やめはり寿司をつくったり、田植え体験をしたり、もちつきをしたり、うなぎ漁体験をしたりと、独自に工夫したメニューで生徒さんたちと心の交流をしました。引率する先生たちは別の宿に泊まり夜間に巡回するだけ。子どもたちだけで体験できた楽しい田舎生活だったと思います。みなさんほんとうに喜んでくださって、滋賀県から来られた中学校の生徒さんたちは、その時の感想を新聞記事風に仕立ててどっさり送ってくれたんです。それ見たら可愛くてね。こちらも感動しました」と、奥山さんは微笑みながら彼らの感想文を見せてくれた。

修学旅行のカヌー体験

日本風景街道熊野ーシーニックバイウェイ紀南ー

地域と地域・人と人を
人と情報のネットワークでつなぐ
生きたホームページをつくりたい。

日本風景街道熊野
ホームページ（ＨＰ）作成委員会
委員長
糀谷昭治さん

シーニックバイウェイ
とは

「もともとシーニックバイウェイというのは、景観を意味するシーン（Ｓｃｅｎｅ）の形容詞シーニックとわき道を意味するバイウェイ（Ｂｙｗａｙ）を組み合わせた言葉で、高速道路の開通でわき道になって取り残されてしまった地域に存在する素晴らしい景観・歴史・文化・自然・建築などを見直し、地域を再生しようと米国で始まった運動なんです。日本では３年程前、北海道から始まって、昨年くらいからかなあ、和歌山でも和歌山県と国土交通省紀南河川国道事務所が中心になってやろうということになったんです。道を地域住民と共につくり、魅力ある環境や地域づくりと一体化していこうとする道路行政の一大方向転換の始まりで、これも良い方向の時代の流れだなあと感じています」と、お話くださったのは『日本風景街道 熊野』ホームページ作成委員会委員長の、糀谷昭治氏。

「それで、シーニックバイウェイをＰＲするためのシンポジウムが二回ほど田辺市で開かれました。事業化にあたり県民の皆さんにもシーニックバイウェイを広く知ってもらう必要がある（第一の目的）ということで、急遽今年の２・３月に和歌山県がＨＰを作成することになったんです。そして、そのコンテンツ作成を『ＮＰＯ法人市民の力わかやま』が担当することになりました。二番目の目的は、紀南地域の観光情報を発信して観光客を紀南に誘引することですが、ただ観光情報だけをホームページに載せるんやなくて、農業体験や川遊び体験など近ごろは各地域でいろいろな活性化事業をやっておられますけど、そういった地域で頑張っておられる人たちの顔が見えるような情報が発信できたらええなあと。それとですね、もう一つの目的として、参加団体が現在六十八団体あるんですけど、お互いまだ顔見知りではない団体同士、交流・連携して地域の活性化をやっていこう！です。この大変な三つの目的をいわれています」

「まず、どんな団体 ·グループが参加しているのか、どんな人がいてどんな活動をしているのかを知ることが第一歩なんです。そしてキーマンを知り、交流を深めて信頼関係を築く。この、人と人の信頼関係が根っこにないと情報の共有化も形だけに終ります。今までのＨＰが更新されず死屍累々（ししるいるい）なのは、デザインの美しさや形だけの情報だけに頼ったからです。我々は通り一遍の情報収集じゃないんです。実際に参加団体や行政の人とトコトン話をして生きた情報を貰えるような関係を築き、これをベースに参加団体間や行政との間に交流連携が生まれる様に動いてきました。今、これらの努力がやっと実ってきて、情報の共有化が進み『日本風景街道 熊野』が動き始めたのが嬉しいんです」と感慨深く語る糀谷さん。

ホームページが
生きていること。

　糀谷さんが理事をつとめる『ＮＰＯ法人市民の力わかやま』（理事長・坂口總之輔氏）は、平成十六年にＮＰＯ法人格の認証を受けて設立した『ＮＰＯ法人わかやまインターネット市民塾』が十八年八月にさらに活動内容を広げるべく名称を変更した市民活動グループである。「さまざまなグループや団体との積極的な交流連携を図りながら、地域情報のプラットホーム化を担いつつ、地域の活性化、コミュニティビジネスの創出と発展、まちづくりに寄与する」ことを目標に活動している。

　「この『わかやまイベントボード』は和歌山県内のイベントと活動団体を一覧にして紹介するもので、ことしの二月まで県と協働して運用してたんですが、三月から『ＮＰＯ法人市民の力わかやま』で運営を引き継ぎました。もうすぐ、アクセス数が四万件を超えるほど結構反響があるんですよ。このサイトでは基本的に主催者に登録してもらい、自分たちでイベント情報を入力していただくようになってます。中にはパソコン扱いなど不得手な人もいて、代行入力でサポートし

日本風景街道熊野
http://www.kumano-yorimichi.com

ています。実際、ちょっとこのホームページのぞいてもらえたら一目瞭然なんやけど、ほれ、30件以上のイベントがある日がたくさんあるんですよ。現在二百十四団体に登録してもらってます。これがどんどん発展、拡大していってるんですからね。入力ボランティアも募集中です」

「なぜ拡大しているか。一つの理由は携帯版をつくったからです。そして『日本風景街道 熊野』のホームページとリンクさせたこと。『日本風景街道 熊野』のホームページからイベントボードへ飛び、又戻るようになってます。某通信会社と連携して、激戦のなか、コンペに勝ってコンテンツ制作を任された、そのきっかけになったのはやっぱり『わかやまイベントボード』の運営実績が大きかったと思います。もう一つ、「生きたホームページ」をキャッチフレーズとしてやってきたこちらの姿勢が評価されたんでしょう。イベントボードは毎日、『日本風景街道 熊野』は二日に一度ぐらいのペースで新着情報を載せています。ホタルの生息地とか初夏の花々、海水浴情報といった特集のコンテンツも好評です。ホタルの紙芝居までアップしました。観光パンフレットや雑誌などに載っている情報ってどこも似たり寄ったりやないですか。飽きてるんですね、観光客の皆さんも地元の人も。私たちは「耳より情報」で、たとえば海の生ハムが美味しいとか、どこのめはり寿司がうまかったとか、色川の紅茶は絶品だとか個店名までは残念ながら紹介することはできませんが、現地の人が歩いて見つけたような生きた情報を『日本風景街道 熊野』のホームページにこれからも盛り込んでいきたいと考えてます」と、糀谷さんはいう。

「そしてもう一つ、携帯サイト『紀南発信いつどこナビ』のコンテンツを作成しました。今回は那智勝浦、太地、古座川エリア版としてその三つの地域に限定されるんですが、これは完全に観光情報に、しかも地元お宝情報に的を絞っています。で、『紀南発信いつどこナビ』はＱＲコードを使うんですが、現地に行く前にパンフッレトのＱＲコードと現地のＱＲコードで百コンテンツほどの地元情報を携帯で見たり聞いたりできるんです。しかも日本語、英語、中国語、韓国語の四つの言語で対応しています。『日本風景街道 熊野』は、『わかやまイベントボード』と『紀南発信いつどこナビ』の二つの携帯移動サイトとも連携していきます。これは技術の進歩・時代の流れなんで、うまく使っていきたいですね」

「これからはホームページ『日本風景街道 熊野』、移動媒体にも対応している『わかやまイベントボード』、ユビキタスサイトとして音声・動画に対応した『紀南発信いつどこナビ』、紙媒体の雑誌・コミュニティ誌・パンフレット。そして、忘れてはならない人間媒体『口コミ』。これらを上手に掛けあわせながら立体的に効率よく、インパクトのある現地情報＝新しい観光情報を、多彩な方法で提供していかなあかんなあと思案しているところです。しかし、一番大事なのは魅力ある景観・歴史・文化、魅力ある地域、魅力ある人、そう人や」と、飄々とした顔つきで糀谷さんは楽しそうに笑った。

和歌山大学観光学科

国際競争力ある観光経営と地域再生を担う人材を育成。

国立大学法人和歌山大学
学長
小田　章さん

ひろがる可能性、
観光学で集客競う。

　近年、「観光学」を看板に掲げる大学が増えている。政府が「観光立国」を提唱して、観光産業のスペシャリストを求める機運が高まっているからだ。ひとくちに「観光学」といってもそのフィールドは多彩。それぞれに大学は工夫を凝らしたカリキュラムを用意して、学生あつめに知恵を絞る。そのなかにあって、和歌山大学では二〇〇八年春に国立大学で唯一の「観光学部」の設置をめざして、その前段階として来春〇七年に「観光学科」を経済学部のなかに新設する。そのあたりの現況とこれからの展望について和歌山大学学長、小田章氏にお話をうかがった。

　「観光学科の設立はほぼ確定しています。最終的にはまもなく本庁から内示がくるでしょう。問題は再来年の観光学部ですねえ。私の考えでは学部をつくらないと意味がないんです」と、小田学長。「そもそもこの話は、最初、平成十六年四月に定例記者会見があって、新学部をつくりたいという話をその時ちらっとしたんですけど、そんな考えをじつは持ってますよというお話をしただけなんです。それが、毎日さんもふくめて翌朝の各紙に「学長、新しい学部構想計画中」とぼぉーんと大きく取りあげられたものですから、それは大学関係の皆さん、びっくり仰天でした。私、そんなこと学内でまだ誰にも話したことなかったんですから。ですけど、なぜそんなこと考えていたかというと、そのころ国立大学の法人化が間近に迫っている時期でして、正直、いまある三学部だけではちょっと危ないなと思っていました。当時、統廃合の波が来ていて、うちの大学も数の論理からいって危ないかも知れないと。経済学部でも一学年でせいぜい三百九十名でしょうし、教育学部、システム工学部の三学部及び大学院すべてあわせても約四千五百人ほどの学生数ですから。規模からいったら下の方です。受験者数がどんどん減ってきたりして下手するとどこかとひっつけられたりされかねない。そんな危機感がありました。で、これは私の考え方なんですが、三つより四つ、四つより五つ、学部を増やして、大学として大きくなればそう簡単にはつぶされないと」

　「最初は、じつは私のアタマに観光学部という発想はまったくなかったんです。それで、〇三年だったと思うのですが、政府から観光立国宣言というのが出てきました。観光というのはこれからの時代、大きなテーマになる。重要戦略産業になる。観光白書をずっと読んでいますと、確かにこれからは観光だなあと。ちょうどそのころ平成十六年ですが「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたりして、きっと時運もあったんだと思いますね」

　「文科省と幾度も折衝を繰り返しながら、いろいろな方々に力添えしていただける

よう一生懸命働きかけをして、ようやく新しい学部（学科）を立ち上げるところまで漕ぎつけました。紆余曲折ありましたねえ。和歌山県みたいに一地方で普通、地域の再生を考えたらまず一次産業が中心となるでしょう。二次産業が少なくて企業誘致もむずかしい。でもだからといってなぜ観光学部なのか。一次産業だったら農学部とちがうのか。バイオもあるじゃないか。法学部とか文学部にしたらどうかみたいなこと、いっぱいご意見とかご批判もいただきました。でも、考えてみてください。いま確かに農学とバイオは結びついてるけれど、実際に農学部をつくろう思ったらもの凄いお金がかかる。国がそんな大金だせるわけがない。県でもそんなお金到底ありません。この学部案内パンフレットにも書きましたけど、観光産業というのはいわば分離融合型なんですね。すでに独り立ちしてる、さまざまなジャンルの産業が融合しあって生まれる融合型産業なんです。したがってまず新たなお金がかからないと。それと、地方行政や周辺の産業界と連携しながら新しい学問として「観光学」というものを確立させていくわけですから、これほど時代性にあった学部は他にはないと。私、力説して回ったんです」と、にこやかに笑顔をみせて小田学長はさらに続ける。

問われる特色。
海外の講義受講も。

「今後、北海道とか沖縄、四国などにも観光学を看板とした大学が相次いで開設されるみたいですけど、われわれ和歌山には和歌山が独自に背負っている観光資源とか歴史的、文化的な背景がありますし、他の大学と同じようなものを私たちはつくるつもりはありません。で、文科省がわれわれに突きつけてきたことは、とくに外国からの訪日客をきちんと「もてなす力」、その人的不足を補うための有能な人材を育成すること。それが至上命令なんです。ただし、われわれがめざす観光学というのはただ現場にあって実務的な接客業を習得させるのではありません。もちろん履修科目のなかにインターンシップ（就業体験）やフィールドワークといった現場で体験学習する演習も必須科目としてやってもらいますけど、さらにもう一歩深く踏み込んだところで学問として観光産業を学習してもらい、この国際化時代にふさわしい観光産業をプロデュースすることができたり、観光資源を発掘して地域再生へと結びつけることのできる有能な人材を育てていきたいとカリキュラムを練っているところです」　「欧米ではツーリズム学とかホテル学といった先進的な教育で専門家を養成して、理論と実務を兼ね備えた総合的なプロデュースのできる人材を多く輩出しています。うちの大学もすでに国際的な交流協定を結んでる、あるいはこれから結ぼうとしている、たとえば東北財経大学（中国）とか、ハワイ大学（米国）、デュッセルドルフ大学（独）といった世界各国の一流大学と協力体制をさらに強化させていきます。とくに観光学部（観光学科）では〇六年度新規事業として文科省が力を入れる「ｅ－ラーニング」と

いう未来型教育システムを導入して、外国の大学で開講している講座を日本にいながらにして受講できるよう図っていきます。もちろん海外研修や留学プログラムも用意して、留学先で取得した単位は本学の卒業単位として認定する制度も取り入れます。語学教育はとにかく徹底させます。国際的なコミュニケーション能力を高めるため語学教育はもの凄く大事なんです。実習内容などそのへんの外語大にも負けてません。英語に加えてアジア言語をふくめて外国語を学んでもらいます」と、和歌山大学学長の小田章氏。〇七年四月に誕生する「観光経営コース」と「地域再生コース」の二つの新設コース。さらに三つ目のコースとして、〇八年四月には「文化交流コース」を開設し、本格的な観光学部の設置をめざす。

東北財経大学（大連）

ハワイ大学

ＮＰＯ法人花つぼみ－田辺市－

人のこころに、街中に花いっぱいの輪を。街の花人をめざして。

ＮＰＯ法人　花つぼみ
理事長
古守一晶さん

花を見て感動。
人と分かちあいたい。

　その活動は最初、一人の男のささやかな思いつきから始まった。昭和五十八年に会が発足、以来二十余年にわたって現在も精力的に活動を続けている。全国的な「花いっぱい運動」の先駆けとなった。ＮＰＯ法人「花つぼみ」の理事長、古守一晶氏にお話をうかがった。

　「三十六、七ぐらいのころですかね。いろいろとね、地域の代表や議員さんなどを担ぎあげ、応援しながら自分たちの地域をもっと良くしていこうと、選挙のときには仲間たちと一生懸命になって燃えておったんです。でもね議員さんを押し上げても、そのあとなかなか思い通りにはならん。漠然としたむなしさを感じてましたね」

　「生まれは私、白浜町富田のほうで、住まいが新万。二十五のときから浴衣寝間着の縫製業やっておったんですが、工場が向こうにあって、賃加工でミシンかけてあちこち内職で外へ出したり、私も田舎まわりとか集配とか、そんなこと十年ほどやっているあいだに、なんやこのままではもの足らんというか、もっと別なことに挑戦したいという思いがずっとくすぶってました。すでに当時、バブル期に入りかけのころで、株の相場とかね、それなりに私も本業こなしながら、まだまだお金、お金って追い回しておった。若かったしね、思い切りやったなあ」と、当時をふり返りながら、ふぅうと溜め息をついて古守さんは静かに笑った。

　「で、結局ね、身の丈以上のことして、まあドツボにハマった。いろんなことが自分のなかでありまして、半年とか一年ぐらいかな、生きざまを真摯に見つめ直す機会があったんです」

　「そんなときよ、花と出会ったんよ。家の庭ではじめて花の種まいたりね。ひなげしの花やったんですけど、冬の寒さにあたるとあかん思うてビニールかけてやったり、私なりに手間かけたんですが、春になってあるとき庭先ふと見ると、赤いひなげしの可愛らしい花が一面に咲いてたんです。涙でるほど感動しましてね」

　「この新万というところは切り開いて開発された新興住宅地で、そのころはまだぽつんぽつんと家が建ち始めてたころで、造成前の空き地がいっぱい残ってた。よっしゃあ、どうせ空いてるんやったらそこへ花植えたらきれいやろうなあ。そんな単純な発想で仲間たちに相談を持ちかけたら、そりゃあおもしろいな、やろうやろうという話になりまして。三角公園になってますけど、はじめは畳一畳ぐらいの空き地にね、見よう見まねで土を耕して、花の種を蒔いてみた。開花時期になると、きれいな花が咲く。みんな気心のよく知れた仲間たちで、ほとんどが自営業者とか事業家でしたが、よほど花のことが好きになりましてね。プランター買ってきて苗植えこんだり、ちょっとした小さな空き地見つけてくると、こんど

はどんな花植えようか、なあんて結構みんなで楽しんでましたねえ」

「もともと十一人ほどの小さなサークルみたいなところからスタートした運動やったんで、三、四年経つうちに限界が見えてきた。子どもたちの通学路に花を植えてみたり、公園の一角を借りて花壇つくったり。私たちの活動を見て、手が足りないようなら手伝ってあげましょうという人たちが少しずつ増えてきてました。でもあくまでボランティアですからね、彼らの意思まで拘束することはできない。休日に毎度の作業ともなるとだんだん人も減ってくる。で、対立意見が飛び出したり、あらためて人間関係のむずかしさ知ったのもちょうどそのころですね。こんなやり方で近場だけで進めてみてもいずれ必ず潰れてしまう。やっぱりまち全体を巻き込んで市民参加の大きな運動にして裾野を広げていかんとだめや。これが私たちが下した結論やったですね」と、古守氏。

新万三角公園
並んで、草引きをしている、中学生達。
この日は「新万花の会」と「高雄中学校」の合同作業日です。

新庄総合公園「コスモス秋まつり」

花の田辺をＰＲ。
花で人は呼べる。

転機がおとずれたのは、昭和六十三年。国道４２号線田辺バイパスの沿道約七百メートルに十万本ほどのコスモスの苗を植えた。

「今でこそ複線になってますけど、そのときはまだ単線やったからね。二車線の半分の土地が遊んでた。建設省（現国土交通省）の管轄でしたが、うち単独で話しあいに行っても到底ムリなんで、田辺市になかに入ってもらって、田辺市が借り受けして、市から花つぼみが貸してもらうというカタチで、コスモスの苗植えましたよ。二、三十ほどの団体に呼びかけして、企業とか各種団体、一般の人たちまでふくめて三〇〇人ほどのボランティアたちが手に手に鍬やスコップを持って参加してくれました。チューリップでもよかったんやけど季節がちがう。やっぱり秋はコスモスでしょう」

狙いどおり、その秋、長い道沿いにまるで花の絨毯を敷きつめたように赤やピンク、白のコスモスが群生して乱れ咲き、クルマで田辺国道バイパスを走り抜ける地元の人々や観光客たちをあっと驚かせ、話題を呼んだ。「コスモス大作戦」と呼ばれたこの花いっぱい運動はその後周辺地域に影響を与え、近隣の市町村でもいろいろとその地域色を生かした「花いっぱい」のまちづくり運動が実施される一つのきっかけをつくった。地域美化の功績で「花つぼみ」は感謝状とか平成十年、環境庁長官賞を受賞するなど高い評価も得た。平成十五年、緑化推進運動功労者として内閣総理大臣賞を受賞している。また平成十一年十二月、県の認証を受けて紀南地方では初めてのＮＰＯ法人格を取得することができた。

「山あり谷ありの連続で正直疲れるこ

ともありました。そんなとき表彰していただけると、大勢のみなさんとともに汗水流してやってきたことが公でも認められ、大きな励みになりました。嬉しかったですね。ＮＰＯ法人になるとボランティアサポート・プログラムといって、国（国土交通省）や市と組織的に連携体制が取れるようになります。たとえば花の苗代とか掃除道具一式は国が提供しましょう、ゴミ処理は田辺市が受け持ちましょう。そのかわり労力は無報酬ですよ、みたいな相互協定ですな。収支決算報告も義務づけられる。透明性というか、より確かな高い信用力が求められます」

　これまでにも「花つぼみ」はいろいろなボランティア活動を実践しており、たとえば田辺バイパス田鶴の交差点や新庄総合公園、あるいはＪＲ田辺駅前など市街地を中心に、春にはチューリップやパンジー、夏にはハナスベリ、キバナコスモス、秋にはコスモスが咲き誇る「花のまち田辺」として、一年中、色とりどりの花を咲かせてきた。

　「せっかく花の田辺というところまできているのなら、これからは年間三〇〇万人が白浜へ来るという観光客の皆さんにはぜひ田辺市まで立ち寄っていただきたい。十月には弁慶祭もあるし、そういった大きなイベントと連携させて花のまち田辺をもっとＰＲしていきたい。花で人は呼べるんです」と語る古守理事長の瞳は少年のようにきらきらと輝いていた。

ツール・ド・熊野

自転車レースのアスリートを熊野の公道に。全国から人を呼べるイベントに成長。

ＮＰＯ法人　ＳＰＯＲＴＳ　ＰＲＯＤＵＣＥ　熊野
理事長
角口賀敏さん

国内では前例がない公道での自転車レース

　熊野を舞台に繰り広げられる全国でも屈指の自転車ロードレース『３ＤＡＹ　ＣＹＣＬＥ　ＲＯＡＤ熊野』。ことしからその名称を『ツール・ド・熊野』とあらため、５月１１日、１２日、１３日の３日間をかけて盛大に開催される。その大会実行委員長であり、主催者である「ＮＰＯ法人　ＳＰＯＲＴＳ　ＰＲＯＤＵＣＥ　熊野」理事長の角口賀敏氏にお話をうかがった。

　「もともと『ツール・ド・熊野』というのは南紀州サイクルスポーツクラブ実行委員会という地元有志の方々がやっておられたアマチュア参加の自転車レースです。実績もあって、二十年間やってこられていたんですが、去年で大会を閉じてしまうことになったので、そのまま名称を継承させていただくかたちで本年度からわれわれが使わせてもらうことになりました」と、角口氏。

　「世界的なレースとして有名なのは、やはりツール・ド・フランスあたりでしょう。日本でもツール・ド・北海道とかツール・ド・おきなわ、などありますが、沖縄などはワンデイレースといって一日開催のレースです。自転車のロードレースが盛んなヨーロッパでは、一日平均１８０キロから２００キロ、それを２０日間ほどかけて走り抜くんです。ツール・ド・フランスは、フランス国内とその周辺地域をふくむ約３０００キロの距離を３週間以上かけて競いあいます。マラソンは４２キロ走りますが、それでも一日で終わってしまうでしょう。だから自転車のロードレースはスポーツのなかでもっとも過酷な競技だといわれてます」と、落ち着いた口調で角口氏はていねいに説明してくださった。

　「自転車競技はオリンピック種目になってますし、中国とか台湾など最近ではアジアでもロードレースが盛んでしてね。中国など国家をあげてどんどん強い選手を輩出してきています。もっと日本でも普及してくれても良さそうなものなんやけど、まず道路使用の許可が取れない。道路規制がたいへんだと。公道というのは自転車レースするためにつくったんやない、地域住民の生活道路としてあるんや、というのが所轄する警察の見解です。そういう使い方されたら迷惑なんだ、というのが彼らの本音ですね。北海道とか沖縄で大きな自転車のロードレース大会が行われる。でもあれは特別中の特別なんやと。ツアー・オブ・ジャパンという大会があって、これは大阪からスタートして最終ゴール地である東京までの間、何ヵ所かを数日かけて点々とするんですが、大きなレースといえばこのあたりでしょうか。普通、何日間か費やしてロードレースは実施されます。ステージ（開催地）が複数になるとそれだけ運営がたいへんやし、当然大勢のスタッフもいるし、正直、お金もかかります」

「昨年まで『３ＤＡＹ　ＣＹＣＬＥ　ＲＯＡＤ熊野』と呼んでいたわれわれのロードレースもことしの五月大会で第九回を迎えます。発端は南紀熊野体験博に向けて９９年春に、三重、奈良、和歌山の三県をつなぐイベントとしてやろうとスタートさせたのがきっかけでした。せっかく熊野であれだけ大きなイベントやるんやから後々まで残るものをやりたかった。なぜ自転車ロードレースやったか。この周辺地域の特性をあらためて考えてみました。野球にしろサッカーにしろ、人口的な問題とか使用施設のことなどいろいろ考えたらとうてい無理でしょう。で、何か地域に良い刺激を与えて地元が元気になってくれるものはないかと。じかにプロスポーツとふれあうチャンスのない地域にあって、一流アスリートをあつめてきて地元の人たちにプロの迫力見せてあげたらきっと喜んでもらえるんやないやろか、って考えたんです」と、角口氏はお話をつづける。

プロが走った道を
同じように走りたい。

『ツール・ド・熊野』は、昨年の第八回大会とほぼ同じ内容でおこなわれる。赤木川清流コース、三重県の熊野山岳コース、太地半島周回コース。全走行距離３３５・６キロメートル、公道ステージの激しい自転車ロードレースが三日間にわたって展開される。

「文字どおり、プロ（実業団選手）がエントリーしてくるプロスポーツです。全日本のランキングでいえば、一位から百五十位までがＢＲ１（ビジネス・ランキング・ワン）、そのあとＢＲ２、ＢＲ３と続くんですが、こうしたトップアスリートたちが大勢参戦してきます。それぞれ五名、六名の選手をあつめてきて一つのチームとしてチーム戦で戦う。上位三名がそのチームの成績になります。逆に五名でて三人がリタイアしてしまったらそのチーム成績はゼロです。チームの成績であり、また個人の成績でもあり、表彰の対象はいろいろありますが、とくに個人成績はポイントしてカウントされ次年度のランキングに響くから選手たちは必死で頑張りますよ」

「ひとりのエースを勝たせるためにアシストする選手が前を走って風よけになったり、他チームを牽制したり、エースの自転車が壊れたら自分がリタイアしてその自転車を渡したりしてやねえ、三時間ほど走るあいだにいろんなドラマが見られてたいへん面白いですよ。二時間、三時間と道路を封鎖しても目の前を猛スピートで走り抜けていくレースは一瞬です。でもねえ、大会終了後に各地域をお礼にまわると、皆さんもの凄く感動してくれてるんですよ。プロの走りを見てね、やっぱりぜんぜんちがうなあって」

「開催地ではレース前にその市街地を

パレードするんですが、カラフルなデザインのチームジャージに身をつつんだ選手たちがゆっくり通り過ぎると大きな拍手や歓声が沸きあがります。この大会もだんだん地元の皆さんにそのおもしろさが浸透してきて、プロが走った道を同じように走ってみたいと思う人たちが増えてきて、この辺りではけっこう自転車ブームなんですよ」と、ほほえむ角口氏。

「大会中、コースのすべての辻々に、ボランティアの人たちが立ってくれ、ほかの進入路を完全に塞いでくれます。町長さんや区長さんにもご協力をお願いしてまわるんですが、皆さんこの自転車レースをもの凄く楽しみにしてくださってね、お手伝いくださるんです。三日間で総勢千五百名以上のボランティアが大会を支えてくれます。ありがたいですねえ」

「実業団チームが参戦する大きな大会が年間通じて十二戦あるんですが、この『ツール・ド・熊野』は第二戦目です。それとやっと実現できることになったのですが、ことし九月には熊野市ではじめて『経済産業大臣杯』といって実業団レースのなかでいちばん大きなレースが開催されます。あと十月末には、去年八月にもやったんやけど、白浜空港の跡地で『全日本実業団クリテリウム　イン南紀』をやります。だから十二戦中、大きな大会を三戦、この南紀熊野で開催することができるようになったんです。加えて那智勝浦町では自転車ヒルクライムのタイムトライアルレース『熊野古道ヒルクライム』もあります。世界遺産に登録された熊野古道の林道や公道を海抜ゼロ地点から大雲取越え近くの山頂まで急な坂を一気に駆けのぼっていくんです。高低差９６０メートル、これも結構ハードな自転車競技なんですが、参加者がさらに増えてことしは三百人近くなるんやないかな。家族連れや一般の方も参加できる人気のイベントになっています」

いろいろと壁にぶち当たったりしながらも競技大会ここまで引っぱってこられたその秘訣を角口理事長にお尋ねすると、「んっ」と一瞬考えられたあと「それは熱意だけやね」と答えてくださった。

和歌山観光医療産業創造ネットワーク

観光と医療を融合させた サービス展開による 新たな産業創出を図るプロジェクト。

NPO法人 和歌山観光医療
産業創造ネットワーク
理事長
田村友二さん

プロジェクトのため
コンソーシアムを組成

多くの地方自治体が「健康」や「観光」をテーマとして地域の活性化をはかろうとする中、和歌山県でも県や自治体、ＮＰＯ団体などそれぞれが独自の取り組みをはじめている。そのなかにあって和歌山の豊かな観光資源に「医療」の分野を取り入れて、新たな産業を興そうとする試みが胎動してきた。その代表的な存在の一つが『ＮＰＯ法人　和歌山観光医療産業創造ネットワーク』の活動である。今回その代表である田村友二理事長にお話をうかがった。

「昨年七月から和歌山県立医科大学と連携して取り組んできました『観光医療立県和歌山プロジェクト』は、ぼくたちにとってたいへん有意義なものとなりました。このプロジェクト実施のために、観光や医療に関連する県内外の企業や団体、事業者たちとコンソーシアム（連合体）を組成して進めてきました（ＮＰＯ法人和歌山観光医療産業創造ネットワーク、公立大学法人和歌山県立医科大学、中紀バス株式会社、財団法人和歌山健康センター、スポーツメディア株式会社）。期間中、研修会・イベントやモニターツアーなどをおこない、和歌山の観光資源が医療面においてどのような効果を発揮するかを実際に検証、それをもとに観光医療サービスの構築をはかっていく。そしてこれまで局地的だった観光サービスをより全県的な広域観光へとシフトさせていくために、地域連携やフィールドの整備、商品とサービスの開発、人材育成、テストマーケティング、情報システムの構築など、多角的な視野に立って具体的な事業化を考えているところです」と、田村氏。

「このたびプロジェクトでの科学的な裏づけと申しましょうか、医学的な検証結果については近々いずれ和歌山県立医大の方から詳しい調査報告書があがってきます。実は今回このプロジェクトは経済産業省が全国に公募して採択した観光集客交流サービス分野での事業化支援施策なんですね。で、ぼくたちはここまでの経緯をふまえて、この５月から新たに観光医療サービス会社を立ちあげます。もちろんＮＰＯとはあくまでも非営利活動法人であって、ある意味で行政の補完的な役割を果たすことを本分としているわけですが、その点についてはわれわれＮＰＯとして出来ることは充分やってきたと思っています。これからも今までどおり地域活性化のために活動を並行して続けていきます」

「医学なのか医療なのか、医科大の先生方とお話するとき、そのあたりについては気をつかってお話させていただくのですが、ぼくたちが携わっていこうとしているのは観光医療のほうです。一方、和歌山県立医大では昨年の公立大学法人化によって、いろいろと魅力的な活動をすでに精力的に押し進めておられます。産官学連携本部の設置もその一つでしょう。

そのなかで『健康増進・癒しの科学センター』を開設し、同じく七月には『観光医学講座』を開講するなど、医科大学としての独自性を打ち出しておられます。今後は産官学の連携により観光医療という新しいブランドを事業として推進していくわけです」とにっこり微笑んで田村代表はさらに続けた。

来なければ味わえない
クォリティを提供

「もともとぼくは和歌浦出身で、和歌浦をこよなく愛する男です。大学のときに県外にでて企業に勤めたあと、地元に縁あって五年で会社を辞めて戻ってきました。そのなかで地域をふり返る機会があって、ぼくの小さいころと比較してたとえば和歌浦がどうなっているかと思ったとき、なぜかね、自分の役割として今できるモノがあるんやないかって強く感じたんですよ。平成十六年度に国土交通省を手始めに地域の人をまきこんだ活動に参加してきました。同年、世界遺産に登録された熊野古道を被験者の皆さんとウォーキングして、それが心身に及ぼす影響を生理的、精神的、心理的な観点から測定、分析することによって、その科学的な検証をおこなう試みを和歌山県が中心となり取組みました。ゆるやかな坂道、でこぼこ起伏ある山道を歩けば脚筋力に適度な刺激が与えられるとか、語り部とともに歴史、自然散策しながらゆっくり歩くことは脳の活性につながるとか、熊野古道を歩いたり、熊野へ訪れることによって心身のリラクゼーションや健康増進につながっていくという結果を得たわけですが、ぼくたちは今回の観光医療プロジェクトにおいて、そのときのプログラムも参考にしながら、たとえば和歌浦にあてはめて、高津子山でやろうとモニターツアーのなかにも組み入れてみたんですね。で、せっかく海にもってくるんやったら、タラソセラピー（海水療法）の効果もあるやろう。ならばたっぷり海で遊んでいただこう、高津子山からおりて裸足になって浜辺などさくさく歩いてもらおうと」

「熊野という土地柄はぼくも大好きで、三年ほど前から地元の方々と交流を深めています。このたび熊野本宮大社の門前にぼくたちが主体となってつくった足湯

休憩所もオープンしました。熊野というのは山の健康なんですね、で、海の健康というのは和歌浦、加太、白浜とか。そういったふうにすみ分けして、地域の特性に根ざした観光医療のコンテンツをつくっていくのがわれわれの役割だと思っています。さきほども申しあげたようにこれって地域間競争なんですね。わざわざ和歌山へお越しくださる観光客の皆さまに奈良とか京都や神戸と同じことをやっていてもまったく意味がない。二番煎じは二番煎じ。ですからぼくらは観光医療というコトバにもこだわります。たとえば日帰りとか一泊旅行などではなく、少なくとも何日間かかけて和歌山各地をじっくりと回れるよう、周遊滞在型の観光ツアーを考えていますが、さて、そのときどのようなサービスが提供できるか。楽しくなければツーリズムとは呼べません。健康増進とかストレス解消、あるいは美容体験でもいいんですが、和歌山県に来なければぜったいに味わうことのできないクォリティの高さがこれからの時代はきびしく求められると思いますよ」

「ライム・バケーションというネーミングで観光医療ツアーに集客したいと考えているんです。ご存知のようにライムは柑橘類の一種ですが、欧州では古くから広く民間療法で使われている果実で、鎮静、鎮痙、発汗などの作用があるそうです。このあいだ新聞記事で、高野山や熊野の森を代表するコウヤマキ、トガサワラといった樹木にライムと同じ成分がふくまれていて、その樹木が発する清涼感あふれる爽快な香りこそが森の香りとして癒やし効果につながっていると、県と化粧品メーカーの共同研究の成果が紹介されていました。またバケーションというコトバには心をカラッポにする、という意味があるんですね。森、川、海がそろっていて、日本のど真ん中、関西空港がすぐそばにあるという立地条件。さらに、歴史的な資源が数多くあるという強み。ぼくたちはそういった和歌山県が持つさまざまな観光資源を大いに活用させながら、現代の湯治場、癒しの郷として何度でもリピーターとして喜んで来ていただけるような観光医療のサービス産業を構築させ、いろいろと商品化していきたいですね」

加太天然の鯛ー和歌山市ー

年中、旬の味。
働き者の漁師が支える
加太の天然の鯛料理。

和歌山市加太観光協会
青年部部長
稲野雅則さん

天然鯛を振る舞い
昼市を大いにＰＲ。

紀ノ川河口北岸の漁師町、加太。紀淡海峡を挟んで友ヶ島の島影が大きく目の前に浮かんで見える。平日の曇天日にもかかわらず、漁港をかこむように突きでた大波止には何人もの釣り人たちが思い思いに投げ釣りを楽しんでいた。今回の取材先、地元で有名な活魚料理店『いなさ』は漁港のすぐ近くにあった。三代目若主人、稲野雅則氏にお話をうかがう。

「そりゃあ、店の宣伝してくれるんは嬉しいんやけど、私ね、加太観光協会の青年部長やらせてもらってるんですわ。ですからちょこっとそっちのほうの話させてもらいます」と、照れくさそうにそう切りだす稲野さん。そのまま人柄の滲みでたやさしい目をした好男子である。

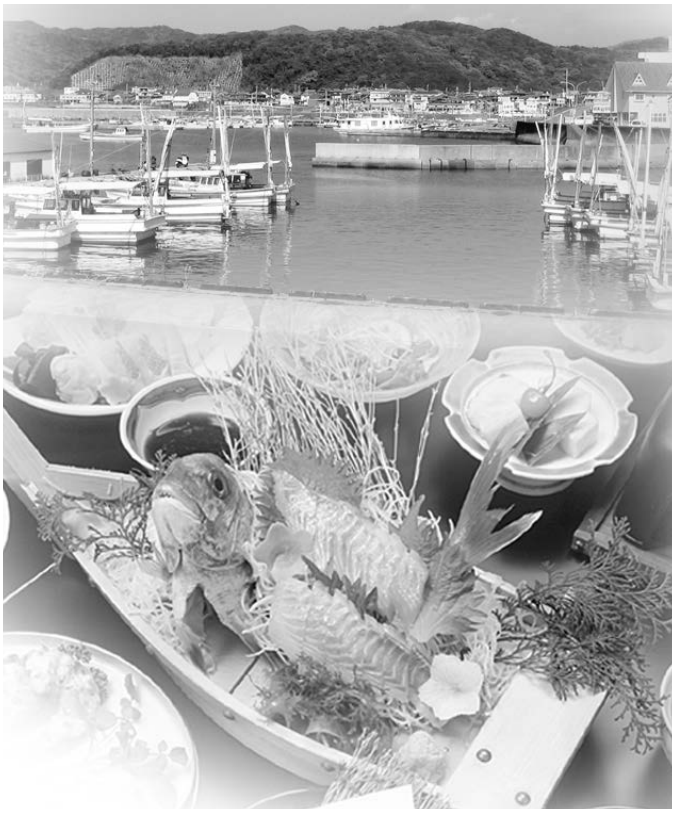
「というのもね、加太にかぎらずどこともそうなんでしょうが、これからの時代、漁村とか山間の田舎まちなどもっと観光という視点にたって考える必要がある思うんです。他との競合もありますからね。どれだけ多くの人にこの場所を知ってもらい、惹きつけ、頻繁に足を運んでいただき、実際気に入ってもらえるか。そのためにも町おこしというか、加太ではいま、いろんな仕掛けをやり始めているところです」

「その一つが昼市ですね。昨年の五月からでしょうか、一月だけをのぞいて、毎月第一土曜日に、ここから見える漁港の魚市場で近海で獲れた魚介類の投げ売りやってるんですよ。全国でも有名な観光地ではたいがい朝市というのがありますが、加太の場合はね、朝早くから客は来んと（笑い）。で、漁協の若い連中たちが中心になって昼市をやろうって気運が高まってきまして。こんな小さな土地でしょう、昔からの顔なじみ同士、お互い気心も知れてますから、稲ちゃん、おまんら観光協会も一つ協力してくれよ、という話になりました」

「漁協さんが主体となってやるイベントですが、私たち観光協会でも後方部隊としてその年の十一月からお手伝いするようになりました。このあいだ淡嶋さんで雛流しやった三月のときも大盛況で大勢のお客さんが来られましたよ。継続こそ大切やからね。これからも続けていくつもりです。初めて参加した十一月のときは、太鼓呼んできたり、天然鯛の刺身を三百人前振る舞ったり、漁師さん手づくりの海鮮汁で持てなしたり。私も店で魚さばいて、会場まで持ち運んで協会のハッピ着て立ちましたよ。ほかにも看板とかのぼり立てたり、泉南地域までチラシ撒きにいったり、加太の休暇村さんにお願いしてパンフレットにイベント情報を載せてもらったり。あんまり予算ないから、アタマ働かさんと（笑い）。主に私たちは広報的な部分でお手伝いさせてもらってます。参加するようになってまだ数えるほどですが、どうよって聞いたら、今月良かったよおって返事かえってきて、

徐々にですがおかげさまで集客率もあがってるみたいです」と、雅則氏。

「二月十一日に休暇村で鯛供養というのがあって、うちの観光協会が主催してやったんですが、宮司さんとか漁業関係者の皆さんで神事を執りおこなったあと、朝獲れたばかりの真鯛の活き造りをさばいて皆さんに振る舞ったんです。この鯛供養のときは『タイレンジャー（紀ノ国戦隊紀州レンジャーのキャラクター）』に出動をお願いして出演してもらいました。こどもたちに大受けでしたよ」と、楽しそうに稲野さんは笑う。「そのほかにもこのあいだの三月十日には、地元の加太小学校の生徒たちや私ら観光協会のメンバーが一緒になって、八十本の桜の木を友ヶ島で植樹したり、日本一のあじさい園めざして、同じ日に約百人の参加者とともに二百本ほどあじさいの苗を森林公園に植えたりしました。加太と対岸の友ヶ島をむすぶ定期航路が地元の漁協組合員さんたちでつくった新会社によって再開されて、また友ヶ島まで汽船に乗って通えるようになったし、隣町の岬町もふくめて、瀬戸内海国立公園にも指定されてるこのあたり一帯の美しい海や自然環境の素晴らしさをもっと広く多くの人たちに知って欲しいと思います」



約２００隻の漁船が
年間３００日出漁。

「大阪でも京都でも卸売市場の人たちとか割烹料亭の板前など玄人（くろうと）やったら皆さんご存知ですが、加太といえば鯛、鯛といえば加太なんですわ。これは潮の流れの加減もありますけど、加太の海は実は大きなたらいを左右に揺さぶるように海全体が動いているんですね。そやから海流に揉まれて鯛の身がぷりっと締まってる。明石とか有名やけど、うちで獲れる鯛のほうが断然うまいなあ」

「加太ではね、アミエビなど撒き餌は一切禁止なんです。これは漁師さんでも乗合船のって一本釣りで釣る素人さんでも条件は一緒。というのもね、ばあぁぁっとアミエビ撒いて、鯛がそれ食べるじゃないですか。それを釣り上げてしめたら、そのまんま鯛の身にアミエビの臭みが残ってしまうんです。食べる側にしてみたらどっちがええかいうことですわ」

「うちのばあちゃんが昭和二十六年にこの地で食堂をはじめて、親父が昭和四十四年から継いで鮨屋やりはじめたんで、私で三代目です。まだ親父も五十八ですからね、現役ばりばりですわ。私は長男ですけど若いころ跡取りとかそんなことまったく考えてもいませんでしたねえ。高校卒業と同時に家を出て、ツテに頼らず大阪の料理旅館とか割烹料理、横浜では立ちの寿司屋など、何軒か修業を兼ねて料理の勉強させてもらいました。これ

は横浜での話なんやけど、サヨリって魚あるでしょう、これがちょっとさわっただけでチャッと肚（はら）割れて内臓飛びでてくるんですよ。なんやこれ、こんなん皆食べてるんかと。で、そのときね、ほんとうに旨いもんって何やろうって真剣に考えたんです」

「あぁ、鯛のあら煮ですか。あれもねえ、別段うちの店が特別やってるんやのうて、このへんの漁師さんやったら皆同じやり方でやってることですわ。郷土料理っていうんかなあ。鯛のカシラと三枚に下ろしたあと背骨などの部位をね、水、酒、醤油だけで煮付けるシンプルな漁師料理です。このあいだもね、大阪のラジオがモニターのおばちゃん大勢ひき連れてやって来られたんで、刺身とメバルの煮付けをお出ししたんですよ。そしたら、お兄ちゃん、ほんまにこの煮付け、砂糖も味醂も使こてへんの、えらい美味しいわぁ、いうてやかましかったんよ（笑い）。でもねえ、素材が本物で新鮮やったら、よけいな調味料くわえて誤魔化さんでもじゅうぶん美味しいんですわ。このへんでは鯛のほかにもメバルやハモなど旬の魚をはじめ、タコ、エビ、アワビ、ワカメなど貝や海藻類もふくめて年間で七十種類以上の魚介類が獲れます」

「漁船が約二百隻、年間で三百日近く出漁してます。規模でいうても、加太は県下有数の漁港です。これからは他府県の観光地もふくめて地域間で競争がますます熾烈になっていくとき、その土地の色というかそういうもんを全国へ向けてもっと強烈にアピールしていく仕掛けというか、手だてが必要やないかと。近くに漁港などないはずの札幌には道内の美味い魚介類がぜんぶあつまってきて、グルメの集積地として観光客や出張族などに評判が立ってるでしょう。和歌山の繁華街でも美味い魚介類をあれこれ食べ比べできる料理店がいくつか出来たら最高でしょうね。それとね、観光ということでいうと、何が一番かといえば、来てもらうことも大事なんやけど、まず地域の一体感こそがいちばん大事なんですわ」と、雅則さんは真顔で答えてくださった。

アドベンチャーワールドー白浜町ー

絶滅の危機に瀕したパンダ等の繁殖に実績。人間と動物と自然とのふれあい、さらに深く。

株式会社アワーズ
アドベンチャーワールド
運営部　業務課長
石川唯史さん

パンダランドに新しい二つの命

西牟婁郡白浜町にある『アドベンチャーワールド』は、サファリとマリンと遊園地などが一体となって構成された南紀を代表する一大テーマパークである。同園を運営する株式会社アワーズの運営部業務課長、石川唯史氏にお話をうかがった。「先日の四月二十二日が当園の開園記念日で、おかげさまで今年で二十九周年を迎えることができました。動物園としてはまだまだ歴史は浅く、また他の園館と競争するつもりはありませんが、じゃあわれわれにとってできることって一体なんだろうという基本的な考えが設立当初からありました。『人間と動物と自然とのふれあい』、これこそが私たちにとって永遠のテーマです。癒しとか動物セラピーなどといった今風なコトバが流行るもっと以前から、私たちはお客さまと動物とのふれあい、私たち飼育するスタッフと動物たちとのふれあい、さらにお客さまと従業員との人間と人間のふれあい、それらすべてをふくめて〈ふれあい〉というコトバが意味するものに重点をおいて二十九年間ずっと努力して参りました。これだけは他にはぜったいに負けないぞという自負があります」と石川氏。真摯にきちんと説明してくださる石川氏の応対のなかに大規模なレジャー施設を高い精度をもって運営していこうとする徹底したサービス精神と強靭でプロフェッショナルな社風を感じとった。

『アドベンチャーワールド』の名を世界中に広く知らしめたのは何よりもまずジァイアントパンダの繁殖実績だった。ジァイアントパンダは中国語で大熊猫と書き、一方、レッサーパンダを小熊猫と表す。ちなみにジャイアントパンダが発見されるまで、パンダといえばレッサーパンダを指していた。「正確にお話しすると、はじめてジァイアントパンダが当園に来たのが八十八年だったんですね。辰辰（シンシン）、慶慶（ケイケイ）という若いオスとメスの二頭でした。ちょうど私が入社した年だったので良くおぼえていますが、四ヶ月ほど居たんでしょうか、中国からお借りしてその間、元気に飼育することができて帰国してから繁殖したんですね。中国側としてはテストパターンのような気持ちで貴重な希少動物を貸し出したのでしょうが、まずその辺りから中国政府に好印象をもってもらえたんだと思います」と、石川氏は話をつづける。

「誤解を恐れずに申しあげますが、とくべつパンダのためだけに繁殖実績をあげてきたわけではないんです。もともと動物園というところは種の保存ということがとても大切なんです。飼育下において累代繁殖させていくという使命が私たちにはあります。じつは私と同期で入社した獣医の女性がいまして、彼女がパンダの来園当初からずっと一貫して見守ってきたという経緯も大きかったと思いま

すよ。もちろんチームで動くわけですから飼育スタッフの苦労もたいへんでした。中国本土以外でジャイアントパンダの飼育頭数は世界六カ国十一施設あって、いま三十二頭かな、そのうち九頭（但し、一頭のオスは繁殖のため、中国へ旅立っている）がこの園内で飼育しているわけですから当然注目されるわけです」

「九四年に、永明（エイメイ・オス）と蓉浜（ヨウヒン・メス）がその当時開港して間もない関西国際空港にＶＩＰ待遇で到着。そこからアドベンチャーワールドのパンダ物語がはじまります。興味のある方はぜひ当園のスタッフが書いた『パンダのひみつ～飼育係が綴る、ジャイアントパンダしあわせ物語』という本をお買い求めいただき読んでもらえたら嬉しく思います。飼育係からみたパンダの生態や可愛らしさをさらに知っていただけると思いますが、二〇〇〇年に来園した梅梅（メイメイ・メス）が永明とのあいだで雄浜（ユウヒン・オス）を生んだあと、〇三年には日本ではじめて自然交配によって飼育下ではじめての双子の赤ちゃんを生みます。そのあとオスの子を生んだあと、〇六年に再び双子の赤ちゃんを生みました」

「お父さんパンダの永明の繁殖能力は中国側も驚くほど優れているようですが、それにも増して優秀なのがお母さんパンダである梅梅ですね。パンダにとって双子を生むこと自体はさほど珍しくはないのですが、梅梅がすごかったのは双子のどちらにもおっぱいを与えながら自分で育てあげたことなんですね。自然淘汰ですからねえ、どうしても強い子だけを育てようとする。中国でもこうした例はまずないということです」と、石川氏。

「パンダのひ・み・つ
飼育員が綴るジャイアントパンダしあわせ物語」
森田倫代・熊川智子 著　Ａ５版　１２２頁　１，６００円

ワンランク上の大人の
メンバーズクラブ誕生

　敷地面積が約百万平方メートルとアドベンチャーワールドは広大である。世界各地の動物が自然な姿で暮らすサファリーワールドにはバスやジープに乗ってライオンとかトラといった肉食動物やシマウマなど草食動物を間近で見ることができる。エンジョイワールドには高さ六十五メートルの大観覧車をはじめ、さまざまなアトラクションが用意されている。マリンワールドでは、アシカやイルカのライブが開催され、時間によってはラッコやペンギンの食事タイムを見学することができる。そしてパンダランドでは日本で一番多い、八頭ものパンダファミリーと出会える。七種類二百七十羽いるペンギンをはじめ、クジャクバト、ツル、カモ、インコ、フラミンゴといった鳥類が数では断トツで多いが、現在、アドベンチャーワールドには海洋、陸上をあわせて百四十五種、千五百五十頭羽の動物たちが棲んでいる。

　「これはぜひ宣伝していただきたいのですが、今年三月からワンランク上のメンバーズクラブを発足させたんです。対象は全世代のお客さまですが、いわゆるナイスエイジ（六十五歳以上）世代の方々にもゆったりと当園をめぐって、より深く愉しんでいただきたい。年間を通じてのご入園だけでなく、メンバーさまだけの特典を多数設けています。ほかにも熟年カップルを対象とした浪漫ツアーやナイスエイジカートなど、ファミリー層や若いカップルだけでなく、年配の方々にもじっくりと愉しんでいただきたいと思います。ご要望に応じてガイドが園内をご案内させていただくサポートツアーなどもご用意しています。園内は広いですからね、せっかくご来園されたのにパンダも見ずにお帰りになったなんてお聞きすると堪りませんからね」

　「テラスを組んでそこからキリンと同じ目線の高さで手渡しでフィーディングできるキリンテラスなんてほんと面白いですよ。ほかにもこれは当日予約で限定メニューになってますが、一日の終わり、スタッフと一緒にジープに乗って肉食動物を獣舎へ収容する体験など目の前で味わってもらったり、反対に、開園の四十分前に園内に入っていただき、ゾウやライオンなどを獣舎から外へ出すところを見ていただくなど、知ればさらにアドベンチャーワールドが百倍楽しくなる裏ワザのメニューもいっぱいそろえてありますので、いつでもお気軽にお尋ねください」

串本町都市交流海洋施設　水門まつり

強い水産業づくりをめざして、都市と漁村との交流拠点を築く。

丸八水産（株） 取締役
吉田俊久さん

水産物のブランド化
月二度の昼市で披露

近年、水産業を取り巻く現状はきびしく、こうした現況を打開するために各漁協ではいち早く水産物のブランド化推進や海遊体験事業など模索しつつ新たな取り組みを行い、まちの水産業の活性化を積極的に押し進めている。その新たな活動の拠点とでもいうべき串本町都市交流海洋施設、『水門（みなと）まつり』という名の施設の指定管理者である吉田俊久氏にお話をうかがった。

「もともと串本町に水産試験場があったんですが、和歌山県が県内の水産研究施設を統合して、開かれた研究施設をテーマにした水産試験場をつくることになった時、串本町は水産試験場に隣接して都市と漁村との交流を目的とした交流基盤施設を併設してつくりますよ、と誘致したんです。昭和五十三年に串本町では日本一と言われる大型浅海養殖漁場を串本、大島間に完成させ、『獲る漁業』から『育てる漁業』への転換を図るとともに、その後もさまざまな漁業の可能性をめざしていろいろと仕掛けを考えてきました。そうした水産振興のための一つのかたちとしてこのような都市交流海洋施設が生まれたということです」と、吉田氏。「平たくいえば、串本町で獲れる魚、もしくは海産物などを全国の皆さんに広く知らしめるアンテナショップ的な役割をこの施設は担っています。まだまだ積極的にＰＲをかさねてやっていかんとアカンと思ってますが、それでも対岸には近くに大島がくっきりと見えますし、ロケーション的にも素晴らしく、串本の海を眺めながら二階のレストランやテラスで新鮮な魚料理を堪能していただけますので観光客の皆さんはもちろん、地元の人たちにもたいへん評判なんですよ」と、よく陽に焼けた顔で吉田氏は笑う。

『水門まつり』は二階建ての木造で、南欧風の明るい暖色系の瓦屋根が印象的。青く澄んだ南紀の海と空によく映える。大きく切りとった窓からたっぷりと自然光が入ってきて館内全体が明るく、ゆったりとくつろげる開放的な雰囲気が漂っていた。一階フロアにはいろいろな魚の干ものなど地元産品の販売コーナーや加工コーナーがあり、地域の案内情報が簡単に検索できる端末機が備えつけられていた。フロア中央に二つの鮮魚用生け簀桶と観賞用の水槽が置かれてあって、串本近海で獲れたタイ、サバ、ガシラ、イサキ、ヒラメといった魚類やイセエビ、ヤリイカ、貝類などが放り込まれてあった。いずれの魚もその鮮度の良さを示すかのように色鮮やかで美しく、泳ぐ海の生き物を間近で見ることができた。約二千平米あるという敷地内には駐車場と交流施設（本館）の隣りに公衆トイレが設けられてあり、この『水門まつり』は県の「紀州なぎさの駅」に指定されている。これは国土交通省が国道沿いに指定する「道の駅」になぞらえてつくった県の指定制

度で、県内に伸びる総延長六四八キロの美しい海岸線をじっくりと味わってもらうための休憩スポットとして紹介され、四季を通じて観光客たちに海とふれあってもらうことが狙いだという。

「前にある駐車場を開放して、第二・第四日曜の月二回、午前１１時より昼市を開催します。このあたりでは樫野漁協の定置網がいちばん規模が大きいんですが、そこらを主体にその朝獲れた魚介類や海産物を観光客の皆さんに喜んでもらえるような値段で売っています。一応メインは水産物やけど、魚だけでなくさまざまな地場産品も並べていくつもりです。オープニングイベントでやって好評だった本マグロの解体ショーなどは定番として、皆さんに楽しんでもらえるような出し物も随時考えていきますよ。委託販売も考えていますが、地元の人なら持ち込みもオッケーです。そのままクルマを会場までつっこんでクルマの荷台に載せて売ってくれればいいかなと。と、いうのも来訪者の皆さんにはできるだけこの地方の水産物や地場産品の良さを知ってもらい、一方で観光客たちと自主的な交流をはかりながら、地元の人たちが少しでもコミュニティーの活性化につながっていければ良いというのが、そもそもこの都市交流海洋施設をつくった第一の目的ですから」と、吉田氏は話す。

民泊の修学旅行誘致
生徒たちに漁業体験

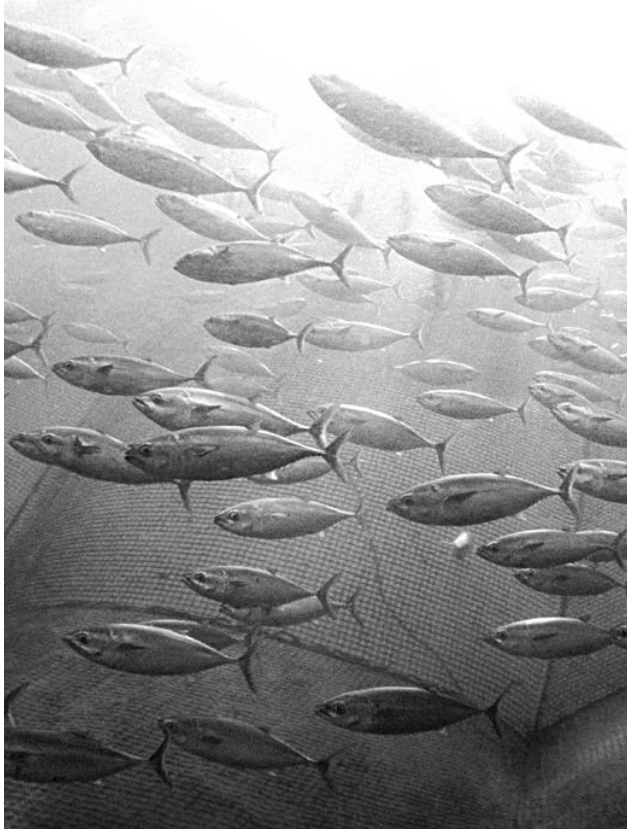
「いま串本町と観光協会、さらにホテルや旅行会社など民間企業が一緒になってまさに官民一体で全国の高等学校を中心に修学旅行の民泊（漁師や農家などの民家に宿泊すること）誘致を仕掛けていっているところなんです。いずれ各地区の漁協、農協にも全面的に協力をお願いするつもりでおりますが、立ち上げとしてぼくの考えではとりあえず今回は大島にある三つの地区、大島、須江、樫野の三地区を中心に民泊をまかなっていけないものかと。なぜか。まず島内なら安全管理がしやすいのと民泊できる一軒一軒が大きいんですわ。それと漁師が現役でいてる。民泊にはいろいろ規約があって、とりあえず島民の皆さんには前もって広く呼びかけて協力を仰ぎながら、大勢の子どもたちの受け入れを振り分けていこ

うかなと。来年には五つの高校の生徒さん（のべ二千泊）がこの串本町へやって来るんですよ」

「来てもらうからには生徒たちにぜったい満足して帰ってもらわなあかんし、ぼくらがやってる串本オリジナルのほんまもん体験のなかから人気メニューを選りすぐって彼らには存分に体験してもらいたい。本マグロの養殖体験などはよそではちょっと真似のできない内容ですし。トビウオすくいや干ものつくり体験も人気がありますよ。うろこ落としから干す作業までぜんぶ自分でやってもらうんです。あとはなんといってもラムサール条約に登録された串本のきれいな海を満喫できるダイビング、スノーケリングやシーカヤック。もちろん海体験だけでなく、農家に泊まって農業体験したりとかねえ。で、手伝ってとってきた魚や野菜はみんなで持ち寄って大鍋で漁師鍋でもやって食材のおいしさを思いっきり味わって欲しいですね」

「ことし三月、長崎の松浦市という漁師町へぼくらも見学に行ってきたんですが、民泊の先進地ということで、かの地ではいまもの凄いことになっています。ぼくらが行ったときはまだ一年も経ってなかったんやけど、すでに一万人突破セレモニーというのをやってた。当然まちへの経済効果も大きいですよね。で、そのとき聞いた話なんですが、小刀で鉛筆一本削ったことのない女生徒がいきなり包丁一本持たされてまな板の前に立って、漁師の奥さんに教えてもらいながらこれぐらいのスズキをなんとか一時間近くかかってさばいて、刺身を造ったそうです。悪戦苦闘してねえ、ところがこれがええんですわ。みんな寄ってたかって、おいしいの連発。その女生徒、大感激ですわ。後日うちに帰ってきて『お母さんきょうの晩ご飯、私がつくる』。で、スーパーへ行って魚一匹買ってきて、料理して親に食べさせたそうです。その女の子、三年近くまともに両親とは口もきいたことがなかったそうで、母親が目を丸くしましてね、その漁師のお宅へ電話かけて、『どのような教育していただいたのか、ぜひ教えてください』って。笑い話じゃあ済まされないけど、たしかに親元を離れて大自然の中で生まれてはじめて漁業体験や農業体験すれば、子どもたちの表情はがらっと変わって生き生きしてきます、たった一日でもね。で、離村式のときぽろぽろ涙を流すそうです。一方、受け入れ側の漁村のほうは高齢化、過疎化がすすんでいるんだけれども、民泊をするなかで町や人がどんどん明るく変わってきたそうで、ええことずくめやね」

そんな受け皿役も『水門まつり』では引き受けたい、と吉田氏は大きく頷いてみせた。



湯浅伝統的建造物群保存地区

醸造文化の薫り漂う湯浅。まちの伝統を守りながら新たなまちづくり推進。

湯浅伝建地区保存協議会
会長
廣岡照秋さん

湯浅に誕生した重伝建保存地区

紀州湯浅の貴重な町並み保存に尽力をつくしながら精力的に活動を続ける地元、「湯浅伝建地区保存協議会」の会長、廣岡照秋氏にお話をうかがった。「じつはね、きょうも奈良五條市から当局の方がお見えになって、あらためてこの月末に保存地区のまちづくりのありかたについて二十数名で大挙して視察にお見えになられるそうやが、実際のところ、古い町並みを残しながらそれを維持管理していくということはホントたいへんなことなんですよ」と、苦笑する廣岡氏。おだやかな口調のなかにこれまでの苦労が一瞬、垣間見えた。「と、いいますのもね、『まちづくり委員会』が立ち上がったのが平成九年。町並み保存の取り組みが本格的になってきたのは、私がちょうど北町の区長をさせてもらっていた平成十五年頃です。もともとこの湯浅というまちは中世の時代から京の都とも関わりが深かったところで、港湾に恵まれ、紀中で物資の集散の場として栄え、商人や役人などいろんな人々の出入りが多かった商都なんですよ。そこへもってきて熊野古道が唯一、街中を通っている。そんな風に賑やかに栄えていた我がまちをもう一度、復活させてなんとか他町に負けない活気あるまちにしていこうと、自治会でやっていたところでした」

「まちづくり委員会は湯浅町のまちづくり諮問機関として公募委員など町民の代表者による委員三十五名と専門委員若干名を中心に組織され、三〇〇名にのぼる協力推進委員のサポート体制で運営された」と、『文化庁月報』で報告されている。「二年間で全体会十七回、各部会を合わせると総計二四〇回以上の会議を経て、平成十一年に出された答申には、伝統的建造物群保存地区制度による町並み保存が重要施策として位置づけられた。そして紆余曲折ありながらも、住民と行政がお互いの役割を認識した取り組みが実を結び、‥‥‥」とつづく。このなかで出てくる「伝統的建造物群保存地区制度（伝建制度）」とは昭和五十年に発足した制度で、まちづくりの新しい手法として国（文化庁が選定）によって制度化され、城下町、宿場町、門前町、商家町など、全国各地に残る歴史的な集落や町並みの保存が進められるようになった。「伝建制度は、ほかの文化財保護制度とは少し違い、まず市町村と地域住民が話し合い、その地域を条例や都市計画によって伝統的建造物群保存地区を定め、国はその中から特に価値の高いものを重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）として選定し、市町村が進める保存事業に対して都道府県とともに補助金などの財政的支援や技術的指導を行っていく」と説明されてあった。

「それで昨年十二月十九日、私ども湯浅町の保存地区が全国で七九番目、和歌山県では初めてこの重伝建地区に選定さ

れたんよお」と、少し声を弾ませて話す廣岡氏。醸造町としての選定は佐賀県鹿島市浜中町八本木宿に続き二例目で、「醤油の醸造町」としては全国初の快挙であった。「それまでにもねえ、以前から湯浅は注目されておったんです。絵画サークルの面々がこのあたりの街角をスケッチなさったり、写真を撮られたり、熊野古道に興味をもった方々が散策するために来られたり。実際、歩いてご覧になったらお判りいただけるかと思いますが、保存地区のなかには江戸末期から明治、大正、昭和の初期にかけて建てられた古い町家や土蔵などがいくつも並んでいてどこか懐かしさを覚えるような趣きがあってなかなかええもんですよ」と、廣岡氏は小さく何度もうなづく。

当の保存地区は湯浅の旧市街地の北西部にあり、十六世紀末期ごろに開発されたといわれる北町（きたまち）、鍛冶町（かじやまち）、中町（なかまち）、濱町（はままち）の四町が対象地域で、もっとも醤油醸造業の盛んであった一帯であった。東西に走る北町の通りとつながりながら、東から濱町、中町、鍛冶町の通りがメインストリートとして南北方向へ走り抜けている。さらに通りに面した家々の隙間から小路（しょうじ）と呼ばれる細い路地がいくつも顔をのぞかせていた。「行き止まりかと思ったらまだその先がある。七曲がりの路地やねえ。幼い子どもやったら迷ってしまうでえ」と、嬉しそうに話す廣岡氏。地区全体がどこか時空を超えて存在する不思議な町並みであった。

どこか懐かしい
湯浅の町並み

案内されて北町通りを歩いてみる。町家の母屋は切妻造り、平入り、瓦葺きを基本として、漆喰壁、本瓦葺が多いことからまち全体に重厚感を漂わせている。連子格子や幕板、虫籠窓（むしこまど）、

袖壁などといった細部の意匠までが画一的ではなく、それぞれが個性を放ちながら、見る者たちを飽きさせない。さらに興味深いことに多くの軒先の格子にはなぜか古い蒸籠（せいろ）が引っかけられてあって、その枠のなかに民具のミニチュアとか実際に使われていた昔の生活道具類など、あるいは湯浅町にゆかりある先人たちの歌詩などを和紙につづって蒸籠に張りつけ吊した手づくりの「行燈（あんどん）」などが展示されてあって、町並みそのものを美術館に見たてたのか、その名も「せいろミュージアム」と称してあった。吊り行燈のほかにも道端の所々には映画の時代劇に登場するような本格的な辻行燈が何基も立ち、日が落ちてそこへほのかな灯りがともると、ほんのりとした情緒が薄闇に浮かびあがるという。これら一つ一つの演出はすべて、このまちを訪れてくれた人たちにできるだけ楽しんでもらいたいとねがう、町内の人々のアイデアから生まれたものだという。

「北町ふれあいギャラリー」という看板の掛かった建物があった。古い民家を改造した建物らしく、屋内には湯浅の歴史などを紹介した写真パネルや資料などが展示されてあって、休憩所も兼ねていた。さらに北町通りを西に歩くと、江戸時代創業の醤油醸造元『角長』から香ばしい薫りが漂ってきた。その裏側に回ると、かつて醤油や味噌など物資を運び出すとき舟を着けたという石垣の大仙堀（だいせんぼり）がまだ残っていた。「このあたりは入り江になってましてね、昔はあれ、河口になって海とつながってたんですよ。浅瀬やから大きな商船などそこまで入ってこれんでしょう。で、沖で停泊する船に荷積みするためにこの大仙堀から石段つかって下りてって小舟に荷を積んで沖まで運んだんです。小さい時分、私そんな光景見てますよ」

「古い家屋を維持保存させていくためには土壁一つ、屋根瓦一つ葺き替えるだけでも多大な修繕費がかかるし、負担は出来るだけ軽減できるよう国や県に働きかけていかんとだめやと思うてます。それが私の仕事やろうなあ。でもねえ、やっぱり私は四町に働きかけて、自治会全体で喧々諤々（けんけんがくがく）やって良かったなあとあらためて思います。全町に先がけて自主防災の組織をこさえたり、コミュニティの結束力がさらに強くなりました。地区の北端に恵比須神社があるんやが、七月二十二日のえべっさんのお祭りを二十年ぶりに地元の漁師さんと一緒になって復活させたんよ。ことしで五回目ですが、これなんかも四つの自治会が一つにまとまって盛りあげて実施した好例です。祭りの夜、小さな子どもたちが浴衣掛けでこの通りをどやどや元気に走ってく、その光景がなんとも微笑ましいわなあ。幾世代にもわたって先人の方々が苦労して築いてくださった湯浅のまちをこのまま低迷させてしもうたら申しわけが立たん。後世の人には元気な姿で引き継いでやりたい。そんな気持ちで皆さんと何とかがんばってやらせてもらってます」と、感慨深げに、そして最後は真剣なまなざしで廣岡会長はそう締めくくった。

白浜・田辺青年会議所

子どもたちに知ってもらおう、ほんまもんの和歌山。「南紀こども体験博」。

（社）白浜・田辺青年会議所
理事長
左海伸和さん

もう一度和歌山のええとこ見直そう

「明るい豊かな社会」の実現を理想に掲げ、次代のリーダーとなるべく責任感を持った二十歳から四十歳までの活動組織である青年会議所（ＪＣ）。来る十一月四日の日曜日、県立情報交流センター「ビッグ・ユー」（田辺市新庄町）をメイン会場として、白浜・田辺ＪＣでは『南紀こども体験博』というイベントを開催する。今期、同ＪＣの理事長を務める左海伸和氏にお話をうかがった。

「そもそもＪＣの役割は、まちづくり、人づくり、そして福祉への貢献、青少年の育成など、様々な分野において我々なりのスタンスで地域社会全体の活性化に向けたお手伝いをさせていただく事を目標としております。そうした中、三年前に熊野古道や熊野三山などが世界遺産に登録され、そのときには私たちＪＣも関連した事業を実施したんですが、三年経って熱も少し冷めつつあるのかなと感じているということもありまして、もう一度、あらためて和歌山県のええところを県外の方々に判っていただけるような事業を行いたいと考えております。「灯台下暗し」というような感もありまして、私たちの地元に沢山存在する様々な資源に我々自身が気づいていない面もあるんじゃないかと。このような素晴らしい自然や文化遺産を私たちＪＣのメンバーも含めてもう一度みんなでじっくりと再認識してみようじゃないかと思ったわけです」と、おだやかな口調で語りかけるようにお話しされる左海氏。

「それと最近テレビや新聞などを見ていてよく思うのですが、子どもたちの周辺環境がぼくたちのころと比べてずいぶん変わってきたと感じています。時代の流れなのでしょうが遊び方もずいぶん違っていて、ゲームとかインターネットの世界が中心となっているように感じてしまいます。また幼い子どもたちが巻き込まれてしまう悲惨な犯罪や事件が多発していることも危惧しています。我々の子ども時代と比べると確かに物質的にはたいへん恵まれ、豊かになったとは思いますが、その一方で、山林のなかに入って昆虫採集に興じたり、近くの川原で仲間たちと泳いだりといった、我々が子供の頃に味わってきたようなごく日常的な、自然を相手に思いっきり遊んで、感動し、さらにそこから何かを学ぶという体験学習のような貴重な機会を現代っ子たちは奪われてしまっているんじゃあないかと心配しているんです」

「こういった時代的背景を鑑みながら、今回私たちはまさに未来を担う子どもたちをメインターゲットにして、この地方にある恵まれた自然環境とふれあい、歴史とか文化、あるいは豊かな郷土の食文化や産品などについて遊びのなかで楽しみながら知ってもらい、何かを感じ取ってくれたら嬉しいなあと思っているんです」と、左海理事長。

「そうなんです。このイベントは、私たち白浜・田辺ＪＣが主体となって開催することに間違いないのですが、もちろんこれだけの大きな事業を我々だけでまかない切れるものでなく、和歌山県や田辺市、各教育委員会、商工会議所、新聞社や各マスコミやＪＲ西日本さんなど、和歌山県内の各企業や諸団体の皆さんにもご協力を仰ぎながら、みんなで一体となってぜひ今回の『南紀こども体験博』を成功させたいと思っています」と、隣席で熱くお話くださったのは、同ＪＣ「まちづくり委員会」委員長の杉本仁史氏。

「私は今回イベントの実行部隊として準備を任されておりまして、あとでご説明させていただく『ほんまもん体験バスツアー』に参加する子どもさんたちを連れていく、その受け皿先となってくださる地域の方々やボランティアの皆さんたちとの折衝を進めてまいりました」

「じつは私は小学校四年生までこちらで育ち、その後はずっと大阪で暮らしておりました。四年ほど前にもともと大好きだったこの地に戻ってくることができたんです。だからよけいに思うのですが、左海理事長も申し上げたように、この地方周辺には都会ではなかなか体感することのできない素晴らしい自然がふんだんに残っています。それを地元の人たちはもっともっと自慢してよいと私は思いますし、今回のイベントのなかではその辺りにとくにスポットをあてて地元の子どもたちはもちろん、都会の皆さんにも実感していただきたいと考えています」と、杉本氏。

ほんまもん体験
バスツアーなど

『南紀こども体験博』の目玉の一つはなんといってもバラエティーに富んだ遊び心いっぱいの楽しい企画「ほんまもん体験バスツアー」であろう。メイン会場となる「ビッグ・ユー」に一旦集合したあと、それぞれ「みかん狩り体験」「田辺街中巡り」「芋ほり焼き芋体験」「紀州備長炭体験」「熊野古道を歩こう」「カヌー体験」という六つのコースに分かれてバスで現地まで移動する。「みかん狩り体験」は上秋津地区農家及び「きてら」にて。定員四十名。「田辺街中巡り」は田辺市湊周辺を約二時間ほどかけて散策する。定員百六十名で、各回四十名ずつをシャトルバスで計四回に分けて送迎する。「芋ほり焼き芋体験」は上野地区農地で芋をほり焼き芋をつくる。定員三十名。「紀州備長炭体験」は秋津川の紀州備長炭記念公園で実際に炭焼き窯を見学する。定員四十名。昼食はバーベキュー。「熊野古道を歩こう」は熊野古道を歩きながら熊野本宮大社まで。定員八十名。昼食付き。「カヌー体験」は田辺市合川ダム上流にて。定員二十名で昼食付き。体験後山遊館で入浴できる。なお「田辺街中巡り」は参加条件として安全上、保護者同伴を原則としているが、残る五つのコースはすべて対象を小学生以上として、子どもだけの参加を薦めている。これだけもりだくさんの体験すべてが無料。仕掛け人である白浜・田辺ＪＣの面々の「子どもたちを何とか楽しませてあげよう」という、その熱意のほどがひしひしと伝わってくる。　またメイン会場となる「ビック・ユー」では体験コーナーとして「梅の種クラフト」「備長炭風鈴づくり」「木工クラフト」「カプラ（積み木）で遊ぼう」などを楽しむことができ、さらには「ほんまもんふるまい」と銘打って、野外では昼食どきに「熊野牛コロッケ」「茶がゆ」「イノブタ汁」「ポン菓子」「梅創作料理」など地元の食材を使った料理やお菓子などがふるまわれる。

「それとメイン会場の目玉として、巨大絵馬への寄せ書きというのがあるんです」と語る、副理事長の関本武生氏。

「本当はギネスに挑戦できるほど大きな絵馬を作成したかったんですけど、奉納先である熊野本宮大社がなんといっても世界遺産ですから、さすがにそこまで大きなものは無理もございまして、恐らく５メートルほどの絵馬になろうかと思います。宮司の九鬼さんにお願いして来年の干支であるねずみを中心に描き、その周りに１１月４日の開催当日に参加してくれた子どもたちに願い事を書いていただく予定になっております。その後、絵馬は一年間本宮大社で飾られる予定になっているんですが、どんな巨大絵馬に仕上がるのか、ぼくたちも今からワクワクしてますよ」と、楽しそうに関本氏は笑う。絵馬奉納はイベント開催からちょうど一週間後の十一日、高速道路の田辺市までの開通日に合わせて行うという。

「これらイベントが一過性に終わるのではなく、そこで生まれた新たな感動や郷土への愛情は次の世代にしっかりと引き継いでいく必要があると思います。そのためにも私たちは全力でやりますよ」と、力強く左海理事長は言い放った。

紀州粉河街づくり塾ー紀の川市ー

「トンマカ　トンマカ」は粉河祭のだんじり囃し。商店街発信の街づくり。

紀州粉河街づくり塾
会長
楠　富晴さん

門前町の賑わい
取りもどそう

　今年三月二十一日に設立されたまちづくりグループ『紀州粉河街づくり塾』。旧粉河町の門前町にあった商店街が中心となって今、新たな活動をすすめている。同塾の代表である楠富晴氏にお話をうかがった。「いやあ、街づくり塾いうてもね、ぼくら先生でもないし、そちらの勉強してきたもんではないですから、当初、塾と名づけることに戸惑いも正直あったんですが、体当たりであたってやっていこ、誰かに導いてもらうんやなくて、自らが主体となって一生懸命勉強していこ、そんな想いから真摯に学ぶという意味を込めて塾あたりがええんやないかって、まあそんな風にみんなで決めたんです」と、ソフトな語り口のなかにも熱のこもった眼差しでしっかりとその経緯について楠会長は説明してくださった。「会を設立したときの会員数は三十二、三名。現在は六十名ほどまでに増えてますが、当初はそのほとんどが旧粉河町の門前町にあった商店街でそれぞれ店舗を構えておられた経営者の方々でした。旧粉河町でいう商店街というのは、ＪＲ粉河駅から粉河寺までの約八百メートルほどある長い直線の商店街でしてね、かつては三つの商店街連合会があったんですが、今年の二月に最後の商店街連合会が解散してしまいました」と、少し残念そうに語る楠氏。

　「もともとぼくは大阪のほうで電鉄系のディベロッパー企業に就職してそこで図面を引いたり、都市計画を担当するなど技術屋やったんです。ところが十七年前に親父が病に倒れてさてどうしょうかと選択を迫られたとき、長男でもあったし、結局会社を退職して家業の酒販店を継ぐことになりました。で、地元に帰ってきて商工会にも入らせてもらって、あらためて自分の生まれ育った郷土を見まわしてみたとき、このままやったらこのまちはいずれ衰退してしまうんやないかという不安を肌で感じてました」「粉河町には大きなマグネットがあるんです。西国巡りの第三番札所である粉河寺にはまちの人口が一万七千人ぐらいしかないときにその当時、観光客が六十万人ぐらい年間で来ておられたんです。その人たちの多くがご朱印を押すだけでつぎの四番札所の槇尾山のほうへ走っていってしまう。ガイドさんがたくさんの束を抱えて走っていく。こんなもったいない話はないやろって（笑い）。もう少しは由緒ある境内とか参道を散策してもらうなり、ゆっくり休んでいってくれたら嬉しいんやけど。もっと遡れば、粉河というまちは紀北随一の商都でして、むかしから紀州一帯の物資が集散する中継地として大勢の商人たちやモノが行き交う、たいへん栄えた土地やったんですね。門前町として栄え、造り酒屋もあれば、うちも三代前までは醤油をつくってました。今は残念なことに酒造屋さんも全部閉鎖になってしまいました」

商店街に活気を
エコステーション

「粉河寺の門前町としてかつてのような賑わいをもう一度取りもどそう、そのためには今までみたいにすべて行政任せやったらあかんよ、という趣旨のもとに集まったのがこの街づくり塾なんですが、郊外型の量販店やディスカウントショップなどが進出してくるなかで、われわれ地元の商売人たちはどんな風に対応していったらええのか。もちろん私たちの地域にかぎらず、流通の業態が大きくかわっているなかで、旧来の商店街はどことも苦戦しているのは周知のとおりですが、今までのように夏場や年末に売り出しやってみたり、買い物すれば商店街ごとに抽選券や補助券を出して抽選会場まで来てもらって何らかの景品をつけるといった従来型のサービスをいくら提供してみたところで今の消費者はついて来てくれません。それでちょっと生意気かもわからんけれど、いっぺんぼくらは商売から少し離れて別の視点からまちの活性化を考えてみようやないかと思ったわけです」

「というのも商店街のシャッターが一つや二つやなしに、連なって閉まる光景を目のあたりにしてしまうと、まち全体の活気までが抜けていくような気がするんです。経営者自身どんどん高齢化していくし、子どもがまだ店を継いでくれるかどうかわからんという状況のなかで、まちづくりなんて云われてもようわからん、それがどれほど即戦力になるの、そんなことは行政の仕事やろ、なんていう声もずいぶんあがりましたが、イヤそうやないねん、われわれのお店を次世代の若者たちに継いでもらうためにも、まちづくりこそが大切やねんって喧々囂々（けんけんごうごう）メンバーの方々とはずいぶんと話し合いを持ちました」と、そのときのようすを思い浮かべながら楠会長は静かに笑う。

「たしかに皆さんの不安な気持ちもよく分かる、でも今までと同じようなこと考えてみたところで結果は目にみえてる。粉河町商工会の大西会長にはずいぶんと発破かけられました。町村合併して紀の川市として大きく生まれかわったとき、ここでなんにもせんかったら他の地域からどんどん置いていかれるで。大きなまちのなかで粉河というまちの存在がますます薄らいでしまうで、と」

「この夏、私たちが主催しておこなった七夕フェスタは新鮮野菜の朝市などが好評で、粉河町商工会も全面的に応援してくださって活気が生まれたし、これをきっかけにＪＡ紀の里さんや粉河郵便局の人たち、粉河高校の生徒の皆さんともいろいろと交流ができて、地域の一体感というか、得るところがものすごく多く、今後とも定期的に開催できればと考えてます」

「それと、十年ほど前から東京の早稲田商店街で実施しているエコステーションというリサイクル事業があって当初から注目しているんですが、これを私たちなりに取り入れさせてもらって、まちの活性化につなげて行ければと思ってます。ある決められた場所に回収機が設置されてあって、空きかんやペットボトルを入れるとゲームが楽しめ、さらに当たり券がでるとそこに記載してある協賛店（加盟店）でサービスや景品がもらえるという仕組みです。これらの仕掛けが若い学生たちにも大受けして人を呼び、店も繁盛しているようです。少し前になるけれどこの事業の仕掛け人であった早稲田商店街の元会長さんとお会いして、いろいろお話をうかがう機会があったんですが、ぼくらはぼくらなりのやり方でこのシステムを上手に取り入れ、環境問題と関連づけながら消費者の皆さんもお店の経営者も楽しみながらお互いが得するようなシステムをつくりたいなあと考えているところです。ほかにも高齢者にやさしい利便性のよい配送システムを立ち上げるべく、いま、街づくり塾のメンバーと検討しています。そして最終的には地域の人々の連帯意識が芽生え何らかの取り組みに楽しく参加いただけるまちづくりが目標です」と、楠さんたちのまちづくりにかけるアイデアは尽きない。

紀州製竿組合ー橋本市ー

紀州へら竿産業を若い世代に継承させ元気なまちの起爆剤に。

紀州製竿組合
組合長
城　英雄さん

日本一の
へら竿のまち

　県の最北端に位置し、大阪府と奈良県に隣接する橋本市。市域のほぼ中央を紀ノ川が流れる。このまちは、ある愛好家たちから、かぎりない愛情と敬愛の念をこめて「へら竿のまち」と呼ばれている。事実、へら竿の生産については昔も今も全国シェアで九割以上を占めており、文字どおりの日本一を誇る。このたびは、紀州製竿組合長の城英雄氏にお話をうかがった。「いやあ、お待たせしまして。少しあついけど、まあ辛抱してや」と、約束の時間どおりに出先から勢いよくもどってきて、陽によく焼けた笑顔を見せながら気さくに挨拶を交わして腰を下ろす城組合長。取材先となった城さんの仕事場では、竹竿のクセを直す「火入れ」という工程のときにつかう四角い「かんてき（七輪のこと）」がすぐ傍でほんのり熱気をもって熾っていたからだ。親方さんが帰宅するまでの少しのあいだ、お話の相手をしてくださった和佐成記さんは城さんの筆頭弟子である。いつの間にか、さりげなく、和佐さんが冷たいお茶を差しだしてくださった。和佐さんのほかにもあと二人、お弟子さんを抱えるという城氏。「たまたまうちにはこうやって若い弟子たちがいてますが、たいていはとりたがりません。そりゃあ、若い子あずかるの、たいへんやもの。この和佐なんか、うちに来だしてから、かれこれ九年ほどになるんやけど、五、六年間ぐらいまでは、住み込みでやってくれてましたからね。で、コイツが最近、結婚して出ていって、近くに居を構えてそれでもまだ通い弟子で来てくれてます」と、微笑む城氏。

　「うちの組合も高齢化しておりましてね、この地域には五十名ほどの竿師さんがおられるんやけど、組合員としては四十二名ですか。私、いま五十三ですわ。組合長を拝命してもう六年ほどになるんやけど、私の年齢ならこの世界ではまだ若手と呼ばれます。弟子入りして一人前になるまでに最低五年から十年、それも無給でね、がんばらな仕方がない。それで独立して、さあて自分のつくった竿が売れるかどうか。自分の努力次第、実力次第という業界やからね。けっこう現実、きびしいんですよ。それだけにね、竹竿に夢もって、自分がつくる作品に夢馳せて飛び込んで来たいという子どもたちがいたのなら、なんとかその夢かなえてあげたいと思う。日本一のへら竿のまちいうてもね、それを下支えしてくれる若い竿師の卵たちがおらんようになったらどないするねん。まあ、そんな思いから去年の十月に『匠工房』という竿師の卵を養成する学校を私たち組合がお手伝いするというかたちで開校させたんです」と、城組合長。さらにつけ加えるなら、この養成学校の運営事業というのは「日本一の竹（紀州へら竿）と織（パイル織物）のまち橋本市」を標榜する同市で、厚生労働省から委託を受けて、伝統産業の継承と雇用促進をはか

るために生まれた地域提案型のプロジェクトでもあった。

海外販路も
視野に入れて

「いまは四名の生徒たちががんばって通ってますよ。そのなかで海釣りなんやが、釣り大好きという女の子が一人おりまして、もし彼女が一人前に育って、プロの竿師となれば日本初の女性竿師が誕生するはずです。まったく右も左もわからんお弟子さんとるのと、まあ二、三年間びっしり学校で自分の技術を磨いた子どもたちを弟子にとるのとではぜんぜん条件ちがいますからね。通常はこの学校で竿づくりの基本を身につけたあとは、親方となる竿師さんのもとに入門して、あらためてそこで親方の竿づくりのお手伝いしながら仕上げの修業をするというかたちになろうかと思いま
す」

もくもくと作業を続けるお弟子さんたち

「竿師というのはね、もちろん和竿という伝統的な工芸品をつくる職人であると同時に、当然釣りが好きじゃないとだめやと私は思うんです。お客さんに使ってもらえる竿を自分らで試釣しに行かなあかん。デビューしてからはお客さんたちの釣り大会にゲストとして呼ばれることもあります。それとね、うちらの商売いうのは『売りッ放し』とちがうんよ。やれ穂先が曲がった、玉口が割れた、胴漆が薄くなった、竿が折れた、竿が抜けるなど、いろんな理由で売ったら必ずメンテが返ってきます。いま流行りのカーボン竿やったら大量生産の大量消費やから、十年も経てばパーツがなくなってしまうかも知れませんけどね。うちらなんか平気で、三、四十年から五十年前の修理竿がいっぱい来るんやから」と、苦笑いする城氏。へら竿は一種類の竹でできているように見えるが、じつは竿の先から真竹、高野竹、矢竹という、それぞれ性質の異なった竹を一本の竿に組みあげていく。その製作工程を細かく分類すれば、じつに一千以上はあると城氏はいう。とくに、張りのある矢竹とバネのある高野竹をつないでいるところがへら竿の最大特長であり、その竹のしなりが強度と粘りとなってへら竿独特の「調子」がでてくるのである。

「へラブナ釣りいうのはですね、海釣りとちごて、座って静かにする釣りなんでね、フナと自分と一対一の勝負なんやな。でね、竹竿というのは釣っていただいたらわかるんやけど、フナが下に潜ってるか、左に行ってるか、右に行ってるかという

のが、竹の繊維が縦に走ってますんでね、ぜんぶ糸をとおしてぜんぶこの手に伝わってくるんですよ。カーボン竿は細い、軽い、強い、なおかつ安い。そしたらどうしてカーボン百パーセントの世界にならんのかいうたら、釣ったときの『釣り味』いうものがないわけですよ。そりゃあゲームフィッシングの大会やったらいいんですよ。競技会ならカーボン竿、全盛ですわ。それでもそれを卒業して、一日ゆっくり魚と戯れたいとか自然と融合したいとか、そんな気持ちになって釣りをされる方にとっては、カーボン竿でばぁーんとかかって釣っても、ただ重たい雑巾ずぅーと引っぱってくるんと同じ感触なんよ（笑い）。生き物の息吹が感じられない。カーボン竿の場合でね、たとえば十三尺、三メートル九十センチの竿一本買ったら、大量生産ですからね、硬い調子、軟らかい調子、ぜんぶ一緒ですわ。それしかない。ところがこれ、竹竿は同じ十三尺もの百本こしらえたとしても、百本が百本ともそれぞれ調子がちがう。微妙に違うんです。同じ銘であっても、同じ長さであっても、一本一本がレアもんなんです」と、城氏の語りは熱くて聞き飽きさせない。

「手にとってみていただいたらわかると思いますが、それ、竿の握りのところに細い籐（とう）曲げてね、一本一本手で貼りつけてあるんですよ。ほかにも卵の殻を細かく砕いて蝶々や鳥などの紋様をつけたり、金粉を蒔きつけたり、伝統的な蒔絵や螺鈿（らでん）など漆塗りの技法を取り入れた華麗で遊び心のある竿もありますよ。ここに並べてあるこれらはこんど私の竿の展示即売会を韓国ソウルの近郊でやってもらうんで、グリップのところなんかちょっと派手めにこしらえてあるんです。いま中国とか台湾、韓国といった、いわゆる漢字文化圏やね、それらの国々では長い歴史もあって池とか湖、川など内水面の釣りがたいへん盛んなんです。それとあちらの方々はもともと伝統的に工芸師とか職人など、ものづくりに携わる人びとを尊敬するという文化が根づいていましてね。だからぼくらが持っていく和竿の完成度の高さを見た瞬間に、これは凄いよとその場ですぐその価値を認めてくれます。これからは海外への販路拡大といったことも視野に入れながら、紀州へら竿の発展のために新しいことにも挑戦したいですね」と、城組合長は両の眼をきらりと光らせた。

今年８月、中国の展示会に出品した城さん

内水面の釣りが盛んな中国で注目を集める

川原家横丁ー新宮市ー

速玉大社と熊野川、門前町のにぎわいを再び。

川原家横丁
株式会社熊野物産社長
丹羽　生さん

新名所となるか
川原家横丁（かわらやよこちょう）

「空青し山青し　日はかがやかに　南国の五月晴れこそゆたかなれ」。熊野速玉大社の境内にある詩碑、「望郷五月歌」の有名な一節である。作者はいうまでもなく、新宮が生んだ望郷の詩人、佐藤春夫。この詩から受ける新宮というまちのイメージは底抜けに明るい。

「さんまさんま、さんま苦いかしょっぱいか、とかね、まあかろうじてぼくらの世代までですかね、これら詩歌の作者が誰なのかは知らなくとも、なんとなく諳（そら）んじてくちずさめるのは」と苦笑しながらお話してくださったのは、新宮市役所まちづくり政策部商工観光課長の鈴木俊朗氏。「ほかにも文化学院の創立者として知られる西村伊作とかですね、ぼくも新宮出身ですけど、こんな辺ぴなまちからどれほど多くの個性豊かな人たちが生まれ育っていったんだろう。あらためて思うんですが、やっぱりちょっと不思議なまちですよ」

その「新宮」というまちの名称の由来となった熊野速玉大社の近くに、またひとつ新たな名所が加わった。鈴木課長さんと同課長補佐の丸石さんが現地まで私たちを案内してくださった。熊野速玉大社の境内の外、ちょうど観光バスや参詣者用に設けられた駐車場から道を挟んですぐ向かいに、目的の観光スポット「川原家横丁」はあった。川原家とは、江戸初期から昭和二十年代にかけて熊野川の河原に建てられた組み立て式の家屋で、最盛期の大正初期には小売店ほか、鍛冶屋や旅館など三〇〇以上が並び「川原家横丁」として親しまれていたらしい。

「上流域で伐採した材木を筏師たちが熊野川を下って新宮まで運ぶんです。その折、速玉さんの前に広がる権現河原にはそういった川の仕事師たちが寝泊まりするような旅館から、食事処、床屋、風呂屋まであって、筏（いかだ）をつなぐ鎹（かん）を打ち治す鍛冶屋などぜんぶそろっていたんです。これはすごいことでして、それらのお店はいっさい釘（くぎ）を使わず、木材を組みあわせるだけの独特な建築技法で建てられていました。というのもですね、川が増水してくると、店をパンパーんと急いで解体して陸にあがって避難し、しばらくして水位が下がってくればまた元の場所に戻って商売をはじめたんですよ」と、ていねいに説明してくださる鈴木課長。この人はほんとうに心から新宮というまちを愛しておられるんだなあと思った。

「しかしですねえ、簡単に組み立てられるといってもね、なんどかぼくもイベントで地元の建築科専攻の高校生と一緒になって、当時そのままの工法で川原家を組み立てたことがあるんですが、どうしてどうして、生徒たちに手伝ってもらいながら汗だくになって完成するまでに三時間かかりましたよ」と、楽しそうに笑う。

新宮商人は
熱かった

　そして現代版の「川原家横丁」。資料によれば敷地の広さは四百六十五平方メートルある。木造平屋建て、六畳大くらいの店舗が五つ。横一列にきちんと並んであった。建築基準法などの関係で、コンクリート製基礎が必要など、完全な組み立て式には再現できなかったが、杉皮を使った屋根や壁など内装、外装は写真などの資料をもとに忠実に復元されてある。さらに横丁の一番奥には完全復元させた一軒が、展示してあった。敷地内の店舗の前には床机のような簡便な腰掛けとテーブルが置かれてある。訪れたひとが思い思いに腰かけてお茶を飲んだり、暫しのあいだ、休息をとるのであろう。日差し除けに大きな日傘を差す穴までこしらえてあった。「門前町のにぎわいを再び」という想いから新宮市が発起人になって、この十月十二日に開業したばかりの「川原家横丁」。オープンセレモニー当日から三日間の特別記念セール期間には延べにして約三千人からの人びとが集まったという。

　「いやあ、あんな盛大に人びとがあつまった光景は久々に見ましたよ」と、驚く鈴木課長。「参拝客や観光客、それ以上に市民の皆さんにまず可愛がってもらわんとあきませんからね。思いの外、市民の方々が楽しみにして来てくださったのが何よりありがたかったです。といいますのもね、この速玉さん、世界遺産に登録された三年前から少しは参詣客も増えたと思うのですが、いわゆる熊野三山参りの方々の観光客動向調査を調べさせていただくと、市民の方もふくめてですけれど、本宮さんとうちの新宮とが同じぐらいで、年間だいたい五十万人ぐらいの人びとがお参りにこられます。那智さんは参詣客だけで一〇〇万人を超えていると思いますよ。最盛期のころは三山あわせて周遊する人の数がゆうに二百万を超えていたときもあったんですけど、最近では百二十万からよくいって百五十万ぐらいだと思います」

　「こちらのＰＲ不足もあるとは思うのですが、せっかく速玉さんに観光バスで

来られても、参拝してトイレ休憩して、あとはすぐに勝浦とか本宮とか、要は次の目的地にそそくさと向かわれるんです。お客さんがこの場所にとどまってる時間は平均して二十分ほどですね。たぶん、ガイドさんの長年の時間計算もあってなんでしょうけれど、それだけじゃあ、やっぱりあまりにもさびしいじゃないですか」と、鈴木課長さんは嘆く。

「ほんとはね、じっくり速玉さんの境内にとどまって熊野三山の由来などにも耳を傾けていただきたいし、阿須賀神社とか丹鶴城跡にも上ってみていただきたいんです。いろいろと歩けば味わい深い観光名所がいっぱいありますからね。今回この川原家横丁をつくった最大の目的は、まず速玉さんの周辺に、かつての賑わいを再現してみたかったからです」

その「川原家横丁」で営業するお店はすでに市内で店舗を構える商店ばかり。市が公募し抽選で選ばれた五店舗である。土産もの、海産物、地元産品、喫茶軽食、菓子などそれぞれ扱う商品がかちあわないよう彩りをつけながら、仲良く営業を開始していた。その中の一つ、神倉の本店をはじめ、市内で広く地元産品をあつかう直営店を三つ出されてる「熊野物産」の丹羽生氏にお話をうかがった。

「三、四割ぐらいでしょうか、地元のお客さんがけっこうお見えになって買っていってくださるのが嬉しいですね。この川原家横丁が懐かしいと仰って何度かこられた年配の方もおられました。うちは他でも商売しておるんですが、そちらはうちの従業員に任せて、ここがなんとか軌道に乗るまではがんばって私がやらなあかんなあ。しかし昔の新宮の商売人は偉かったのう。だって石ころだらけの河原のうえでこれだけ逞しく商売やっておられたんやから。そう思うたらファイトも湧いてきますよ」と、微笑む丹羽氏。

「閑散期にはどんどんイベントを仕掛けていって、皆さんに楽しんでもらいながら、もっともっとお客さんを呼び込んでいかんと。このうしろで河原と遮断している堤防もなんとか工夫してね、切り開けばすぐその先に熊野川が流れてることを皆さんに知ってもらいたいですね」と、丹羽さんはいう。　新宮市が直営する熊野川舟センターの「熊野川舟下り」は、道の駅「瀞峡街道・熊野川」の下にある乗船場から約一時間半かけてゆったりと熊野川を下り、ちょうど速玉大社横の権現河原に到着する。舟には語り部さんが一緒に乗船してきて、途上、それぞれ個性ある案内で舟下りを楽しませてくれるというが、その光景はまさに「川の参詣道」として世界遺産に登録された熊野川の魅力そのもの。語り部さんたちはそのまま「川原家横丁」までお客さんたちを案内して、敷地のいちばん奥に完全復元された一軒の川原家の前に立ち、興ずれば熊野曼荼羅を絵解きしながら、さらに熊野信仰について熱く語り続けるのだそうだ。

わかやまヒューマンカレッジアフターの会

『まちづくりは人づくり』
次世代に継承できる
豊かな地域おこしを。

わかやまヒューマンカレッジ
アフターの会
地域ボランティア
宮下　啓司さん

和歌浦で
市民サミットを

「このなかに趣意書とか、イベントでプレゼンテーションしたときに提出した資料であるとか、こどもたちや学生たちと一緒になって実際に雑賀崎のまちや海辺などを歩いてまわったときの画像など、いろいろ収めてありますので、見ていただいたら、だいたいぼくたちがやろうとしてきた活動の内容がわかっていただけると思います」と、微笑みを浮かべながら一枚のＣＤ‐ＲＯＭを手にして、目の前のソファにゆっくりと腰をおろす一人の中年男性。この方が先の十月に三回にわけて新和歌浦、雑賀崎のホテルや旅館で開催された『和歌浦湾いこかぁサミット』の仕掛け人、宮下啓司氏だった。本職は一級建築士。社団法人和歌山県建築士会の常務理事総務委員長であり、和歌山市支部長という肩書きを持つ。

「このイベントは県建築士会、その平成十九年度地域貢献活動センター補助事業として採択されたものですが、もちろんぼく一人の力だけでやれたものではなく、和歌浦を舞台に活動する市民グループに声かけて、いろんな方に集まっていただき実現しました。ぼく自身もともと雑賀崎の出身で、周辺地域をふくめて、いま和歌浦湾全体の現状をみるにつけ、こりぁなんとかせなあかんいう状況になってますからねえ」と、宮下氏。「皆さん個々にテリトリーみたいなものがまずあって、それぞれ自分たちがやってる活動だけで充分や、こういうところへは参加しないという方々もおられまして。でもぼくはね、お互いがもっと連携しながら大きなうねりみたいなものをつくってみたかった。少子高齢化とか、このまちが将来どのようになっていくのか、皆さん意識はありながら、なかなかそこまで到達していない。よく指摘されることなので、いまさら県民性というところに理由を落としたくはないんやけれど、おらがいちばんみたいな考え、どこかにやっぱりあるんかなあ」と、残念そうに宮下さんは小さく溜め息をついた。

「ですからいろんなテーマを設けてね、今回のサミットは仕掛けてみたんです。第一日目の基調講演で、生まれ育った和歌浦への熱い想いを語ってくださったミステリー作家の前田朋子さんは、地元、西浜中学校出身、じつは私の後輩なんです。さすがプロやね、楽しいお話聞かせてくれました。郷土史研究家の藪信明さんには、のちに新和歌浦と名づけられる広大な未開の地で、明治期の実業家、森田庄兵衛がまず山林を切り開き、海岸線に沿って二本のトンネルまで掘ってアクセス道路を整備させながら、いまの新和歌浦の原形となる大がかりな観光開発に力を注ごうとした、その狙いとはいったいなんだったのか、そこに勝算はあったのかなど、たいへん興味深いお話でした。森田翁がこの地に着眼した最大のポイントは、間違いなくその素晴らしい海岸美にあった

でしょう。かつらぎの出身で、造り酒屋帯庄の御曹司、のちに貴族院議員にまで上りつめる森田庄兵衛が新和歌浦の開発に乗り出すのが、明治四十年（一九〇七年）、いまからちょうど百年前の出来事です。で、今年〇七年には、和歌山大学の経済学部に観光学科が新設された。ふたたびの観光元年といったところでしょうか、そんな意味あいも込めて、念願だった和歌浦でのサミットをぜひとも開催しようと思ったわけです」

『和歌浦湾いこかぁサミット』の第一日目のテーマが「観光・健康」、第二日目のテーマは「文化発信・まちづくり」、第三日目が「自然・環境」。そのなかの全日程で、パネルディスカッションのコーディネーター役を任されたのが和歌山大学経済学部准教授の足立基浩氏だった。

愛着こそが
まちづくりの力

「じつはこのサミットを主催したのが市民グループ『わかやまヒューマンカレッジアフターの会』という組織で、その代表が足立先生です。この会について簡単にご説明すると、平成十二年度、県教育委員会と和歌山大学が共催で生涯学習教育を目的として市民講座を開設されました。その趣旨とは男女共同参画の実現、地域の課題に市民自らが気づき、考え、主体的な判断力を養いながら、それらを解決できる力を育てること。まずその学習機会を提供することだったわけですが、十四年度までその講座は『ヒューマンカレッジ』と呼ばれ、そのあと十五年度から『エンパワーメントカレッジ』と名称が変わります。私が受講したのは『エンパワーメントカレッジ』でしたが、そこでじつにさまざまな人たちと出会い、足立先生や会の仲間たち、ときに和大の学生たちと一緒に学びながら、意見交換しあって、あらためて地域教育に参加することの歓びを体感したものです。受講中、ぼくみたいな人間はただ机上の論理ばかりしゃべっていてもむなしいだけで、このままじゃあ単なる勉強会で終わってしまう、なにか実践していかなあかんって考え続けてましたからね。修了後、せっかく育ってきたまちづくりのマンパワーを継続させていこうよと、同じ思いのカレッジ卒業生たちが集まって、そこへさ

斜面に貼り付くように家がたつ雑賀崎

雑賀崎を実際に歩いて調査をする
和歌山工業高校の生徒たち

らに和大の卒業生などがメンバーとして加わって『アフターの会』が立ち上がりました。それがいまの活動につながっています」と、宮下氏。

「たとえば会が主催となっているオープンカフェ（わかやまの底力・市民提案実施事業）ですね。一昨年は、雑賀橋の橋の上にテントを組んで、十月の週末にかぎり一ヶ月間かけて交流スポットを設けてみました。楽しいことをやれば人は集まってくる。そうすることによって、ひとの流れに回遊性と滞留性が生まれるということが調査結果にもでていましたし、足立先生の持論でした。で、去年は京橋のプロムナードでやったんやけど、これだけじゃあもったいないということで、後半は片男波でやろうと。どうしても和歌浦湾でやりたいと。眼前に海が広がる大きな空間でイベントを打てば内容もさらに広がっていくもので、可愛らしい幼稚園児による演舞があったり、沖縄の伝統的な舞踊であるエイサーの演舞がのびのびと披露できたり、ずいぶん盛り上がりましたからね。期間を延長して今年はさらに来春の一月までぶらくり丁の空き店舗を借りてカフェを運営しています。スタッフの学生諸君が中心になってキッチンや接客、広報とかに分かれて楽しくやってくれています。二十歳そこそこのころはぼくもバンド組んでロックやってたんですよ。だから機材関係には詳しいし、いろんな知り合いもいますんで、たとえばイベントの仕込みとか、行政とのネゴシエーションみたいな裏方的な役回りはぼくたちのような経験のある社会人がやってあげようと思ってます」

「サミット二日目は和歌山大学システム工学部の協力を得て、充実した有意義なサミツトができました。三日目はぼくも少しお話させていただきました。雑賀崎に紀伊水道を一望できるトンガの鼻と呼ばれる絶景の岬があるんです。ぼくもメンバーの一人ですが、その地域の保全活動にひと役買いたいと結成された『トンガの鼻自然クラブ』が生まれるまでの経緯とかその周辺の自然の魅力について説明させてもらいました。またその岬には江戸時代、紀州藩が海防のため、砲台や狼煙場（のろしば）をもうけ、いまも台場跡が残ってるんですが、和歌山工業高校の生徒たちにレクチャーしたのがきっかけで測量したその成果を発表してもらう機会をつくって、彼らにも参加していただきました」

「西小二里とか西浜とか、雑賀崎まで五分、十分で行けるエリアに移り住んで、四十年ほどずっと建築の設計に携わってきましたけど、生まれ育ったコミュニティーというのがものすごく懐かしいんですよ。防波堤があってコンクリートの塊やなくて、あそこは玉石の浜やったよとかね、この磯でよく遊んだよとかね。こどもたちに伝えてあげたい。若いころ、仲間たちと連れだってよく遊んだ『ぶらくり丁』にも郷愁を感じます。そんなまちへの愛着こそがまちづくりを次世代へと引き継がせていく、欠かせない原動力になっていくんじゃないでしょうか。これからも私自身アンチエイジングでいきます」と、宮下さんは目を細めながらやさしく笑った。

串本町観光協会

春呼ぶ南紀に、幻想的な本州最南端の火祭り。

串本町観光協会 会長
中村　洋介さん

水平線上に
夕陽は落ちて

　三方を太平洋に囲まれた本州最南端のまち、南紀串本町。約１２７キロメートルの美しい海岸線を描くその地形は、航空写真でみると、まるで鯨の尻尾のように大きく青い海へ向かって左右に悠然として広がっていた。

　「本州最南端、というのがウチの売りの一つでして、昔からこのまちを語らせてもらうときに必ず使ってきたキャッチフレーズなんやけど、いまでは多くの観光客の皆さんも親しみを込めてよく使ってくださっています」と、日焼けした顔をゆるめながら笑顔で話す串本町観光協会長の中村洋介氏。町内にあるダイビングショップのオーナーでもある。「記事が掲載されるのが１月２５日ですか。そりゃあグッドタイミングやなあ、というのも、『本州最南端の火祭り～潮岬望楼の芝焼き』の開催がちょうどその翌日の二十六日なんです」

　「本州最南端の火祭り、という大きなタイトルを掲げて実施するようになってから今年で８回目になります。最初のころは認知度も低く、集まってくださった人の数が千人ぐらいだったんやないでしょうか。それが昨年のイベントでは観客動員数五千人ですからね。ありがたいことです。広大な芝生を焼きつくす炎の祭典をぜひ自分のカメラに収めたいと、大勢のアマチュアカメラマンが京都や大阪、兵庫、三重などからおみえになります」と、同観光協会の事務局長である坂成正人さんも説明に加わってくださった。

　「もともと昼間におこなっていた行事なんですが、これだけ広大な敷地の芝を燃やすんやから、できれば炎の美しく映える夕刻から火つけ始めてみたらどうやろう、という意見がありまして。おかげさまで今では町を代表する名物イベントの一つに数えられるまでになりました」と中村さん。

　『潮岬望楼の芝焼き』とは、潮岬の先端に広がる約十万平米という望楼の芝生、その古芝に付着して越冬する病害虫の卵を駆除することを主眼として、芝面を一様にそろえ、新芽の出そろいを美しくする、焼いてできた灰を肥料にするなど、芝焼きして生じるいろいろな効果を期待して、二十数年前からつづけられてきた冬の慣例行事であった。通常は毎年１月の最終土曜日に開催される。ちなみに望楼とは「物見やぐら」のことで、かつて海軍の望楼が置かれてあったという。

　また、「太陽の出でゝ没るまで青岬」と俳人山口誓子の句にもあるように、眼前には太平洋が悠然として横たわっており、冬至の前後には、水平線から昇った太陽が弧を描きながらそのまま同じ水平線に沈む、非常に珍しい光景を見ることができるという。

火矢放たれ
祭典が幕あける

　さて、祭典は地元串本高校弓道部から選抜された有志の生徒たちによって放たれる火矢の行射式から幕開けとなる。「大会本部前の土が少し盛り上がっているんですけれど、串高弓道部の生徒たちがそこに横一列に並んで、合図とともに夜空に向けて扇状の方角に火のついた矢を放つんです。ふだん部活で練習している弓矢とはバランスも違いますし、勝手が異なりますから、みんな緊張するようです。地面に突き刺さる矢もあれば、途中で火が消えてしまう矢もある。でも生徒諸君はどの子たちもみな神妙ですよ。白い胴衣に黒の袴姿がピシッと決まっていてこれがまた恰好いいんだなあ。この祭典をみて串高弓道部に入部したいと志願する生徒さんもかなりいるみたいです」と、

愉快そうに語る中村氏。放たれた火矢は放物線をえがきながら古芝に着火して、そこから火の輪が広がっていく。つづけて勢いよく仕掛け花火が打ちあがり、落ちてくる花火の残り火からも芝生に火がつく。さらに観光協会の役員たちが布きれに少し灯油を染みこませた「たいまつ」を手に手に持って古芝を燃やしていく。

　「その間、串本黒潮太鼓が鳴り響いてます。瞬く間に炎は燃え広がり、もうもうと白煙が立ちこめてくる。餅をつくころはまだ少し空もほんのり明るいんやけど、火矢を打つ時分になると、灯台の方角に夕陽がゆっくり沈んでいってやがて闇につつまれます。これも狙っての演出ですが、やってるぼくたちも毎回、これぞ串本の火祭りやといった思いにかられ、ジーンときますね」と語る中村氏。

　「寒いんでね、道路の端にクルマを止めて車中から窓越しに見物しておられる方もたくさんおられるんですが、それやられると正直つらいんです。警察からもきつくお達しがでてますんでね。やはり面倒でもきちんとこちらで用意した臨時駐車場にクルマは止めていただきたい」と、事務局の坂成氏。また観光客からの要望に応えて、今回は潮岬観光タワー横からＪＲ串本駅へ向けて帰りの臨時バスを一便、熊野交通の協力を得て走らせるそうだ。

　火祭り開始前の会場では、トビウオのだんご汁「しょらさん鍋」（千人分）や「芋もち」が振る舞われたり、串本節保存会、トルコ民族舞踊団、串本節のもとになったといわれている潮岬節（みさきぶし）保存会による唄と踊りが次々と披露される。

　「串本を代表する魚であるカツオには、しょらさん鰹と名づけてさらに今、ブランド化をはかっていますが、しょらさんとは地元の古いコトバで愛しい人、恋人

といった意味があるんですね。串本節のなかに『わしのしょらさん 岬の沖で 浪にゆられて 鰹つる』という歌詞がでてきますよ」と、坂成さん。

「燃えても炎の高さが膝ぐらいまでしかあがらないので、近くで見ていても安全なんです。でも不測の事態に備えて一気に燃やすのではなく、みんなで連携を取り合いながら慎重に火をつけていくんです。燃やすと風がでてきます。実はですね、安全面を考慮して前の週に、消防署や地元消防団のご協力を仰ぎながら、芝生の周辺一帯をぐるり五メートルぐらいの幅であらかじめ焼いておくんです。各自が背中に水タンクを背負い、火消しに走りまわるんですね。で、本番までには延べにして二百人ぐらいの人たちがスタッフ、裏方として参加してくれます。この火祭りにかぎらず、まちをあげて何かやろうよと誰かが呼びかけたとき、さっと集まってきてみんなが気持ちよく応援してくれる、そんな風土がこの地方には昔からあるんやねえ。平成１７年に古座町と町村合併して串本町はひとまわり大きくなりましたが、旧古座町の人たちも一緒になって参加してくれることが心強く、なにより嬉しいですね。ぜひ２６日（明日）の火祭りは期待して、ご家族やカップルでお誘い合わせの上、みなさまでおいでください」と、中村会長は力強く締めくくった。